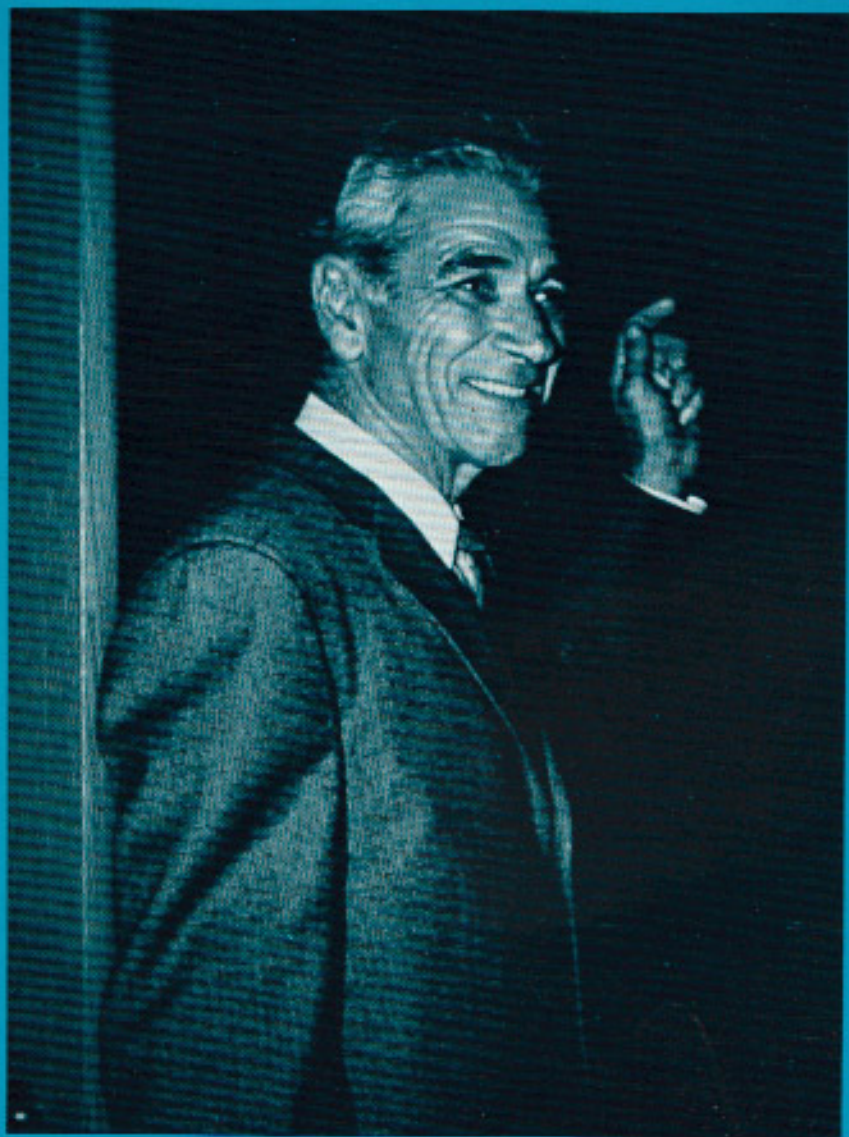


UFOと宇宙哲学の研究誌

# GAPニュースレター

57



ロジャーズ声明の真相	1
進歩した思索家のために	ジョージ・アダムスキー 2
人体極性と重力場エンジン	唐沢宏之 8
米国GAP本部訪問記(1) 第1部「きらめくビスタの星」	久保田八郎 9
空飛ぶ円盤同乗記(10)〈改訳決定版〉	ジョージ・アダムスキー 32
昭和50年度総会、大盛況!	42
月例研究会案内 / 宮内温夫氏、月例会で講演	44
編集後記	45

★本誌掲載記事の内、海外関係のものには翻訳転載権取得済。  
写真共禁無断転載。



### GAPとは

GAPは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々が空飛ぶ円盤の真相について「知る」機会を与えられるべきであるという見地に基ずいて1959年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に眼を転じること、人間はすべて「コズミック・パワー」の御子であり、そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界(惑星)から来る友好的な訪問者からもたらされた「生命の科学」の研究と理解を通じて体得できるものです。

日本GAPの目的は円盤とスペースブラザーズ問題を関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1. この太陽系の他の惑星群から偉大な発達をとげた人類が地球を訪問しつつある。
2. 他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト(接触)しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペースブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。
3. ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の起源と未来の運命の真実を知るのに有益である。

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく、政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです。

◎GAP参加グループを有する国は次のとおりです。

アメリカ、オーストラリア、ベルギー、ブラジル、カナダ、デンマーク、イングランド、フィンランド、ドイツ、オランダ、インドネシア、日本、メキシコ、ノルウェー、スウェーデン、スイス(ABCの順、1971年6月現在)

★表紙写真はありし日のアダムスキー  
(原写真はカラー)

39頁のイラストは会員・池田雅行氏より寄贈

昨年九月十五日頃の国内各新聞に少々不快な短信が掲載されたのをご記憶の方が多いと思う。英国 UFO 協会の会長と称するケン・ロジャーズなる人物が、アダムスキー撮影の円盤写真は昔、英北部の工場で作られたビン冷却器を写真に撮って円盤だと偽ったことがわかった。アダムスキーに脱帽する云々という記事である。思慮深い人ならこの声明こそア氏の名を抹殺せんとする悪質な陰謀か、ま

## 声明のジョーザ 真相

！大失敗の売名屋の愚かな

たはア氏の円盤写真からヒントを得て作られた冷却器をこれみよがしに攻撃の材料にしたと考えるだろう。そして実は後者であったという証拠が出たのである。英国の名高い UFO 専門誌「フライイング・ソーサー・レビュー」誌一九七五年 3-4 合併号の社説に「Sad Story」と題して、この件の真相が暴露されている。「故ジョージ・アダムスキーの主張をくつがえそうとする間の抜けた試み」

UFO キチガイによる無謀かつ無思慮な売名行為によってこうむった典型的な損害云々」に始まる社説によると、九月二十日にレビュー誌幹部のゴードン・クレイトン氏が公表した話で、実は B B C ラジオが放送した「ニューズ・マガジン」番組の出演者の中に冷却器技術者のフランク・ニコルソンという人がいて、この人が一九五九年（アダムスキーの写真が公表されてから六年後）にア氏の円盤写真からヒントを得て問題のビン冷却器を設計したことを「告白」したというのである。しかもニコルソン氏は番組のなかでその事実を疑われたために特許番号を提示した。こうしてロジャーズの声明こそインチキであったことが判明したが、ついでにこの人物の性格まで暴露されてしまったからたまらない。「少々バカをみる羽目におちいった」と泣き言を言う始末で、結局、とるに足りぬ売名屋であったことがわかったのである。

社説は言う。一九七五年九月十七日のプリストル・イーヴニング・ニューズ紙にロジャーズの勇ましい声明が掲載されたが、それによると、ウォーミンスター（UFO 観測のメッカ的場所）の UFO 事件に関する二万語にのぼる「論文」を書いて、それをプリストル大学へ提出しようとしているロジャーズは、「学者は自分の書いた論文に基づいて十分な研究をしてもらいたい」と述べているもののこの「論文」たるや五百件のウォーミンスター UFO 目撃例をたった四十語ずつの報告にまとめたものだという。こんなものを大学で通用する論文だと思っ

る感覚からして正常ではない。更に昨年八月十五日付のハムステッド紙とハイゲート・エクスプレス紙に「UFO は緑色の人間を見守る」と題した記事が出ており、その中に予言者に扮したチャールトン・ヘストンみたいな格好の人物が片手の指を空に向けて、T シャツの前面には円の中に五角形の星が描かれているが、この人物がロジャーズであり、緑の人間（宇宙人？）を見つける方法を示しているのだという。

とにかくロジャーズのビン冷却器声明は英国の各新聞に大きく掲載され、更にこれが世界中の新聞に報道されたためにア氏は全く不利になり、世にいう UFO なるものすべてがインチキ視されかねない状態になった。しかしさすがは英国である。九月二十三日にはデーリー・ミラー紙が「あの名高い空飛ぶ円盤写真は全然インチキではなかった」という訂正記事を掲げ、同日二十二日のプリストル・イーヴニング・ポスト紙は「徹底的な大打撃」と書いて反省した。だがそれ以外の新聞は沈黙したままである。もちろん日本の各新聞はこの真相をまだ知らないだろう。知っても訂正記事を出すとはしないだろう。

恐るべきはマスコミの影響力である。私のユニバース出版社にもロジャーズの声明に関して照会が殺到したし、GAP の会員のなかにはアダムスキーにあいそをつかして退会した人もあった。

「故ジョージ・アダムスキーと彼の写真に對して人が信ずるかどうかはこの場合の論点ではない。不愉快なのは、過度の UFO キチガイによる狂気じみたブレイクのまじない売名行為が、UFO 目撃報告のまじめな研究をやろうとする人々に對して、ひどい害を与えたという事実である。ロジャーズの行為の直接的な結果として、あらゆる UFO 目撃報告はインチキであると思ひ込んだ数百万の人がいるだろうし、間接的な結果としては、その取消し記事を見たか聞いた人々は、次のように結論づけたことだろう。各種の UFO 研究グループの会長たちは「バカの集まり」だと。

UFO 問題に対する風潮が向上しつつあり、UFO の目撃者はすんで事件を語るように勇気づけられているこの時期にあつて、これは一体何たることか」とフライイング・ソーサー・レビュー誌の社説は怒りを爆発させ、二十五歳のケン・ロジャーズなる同国人を暗にバカ者呼ばわりして痛烈な批判をあげせている。

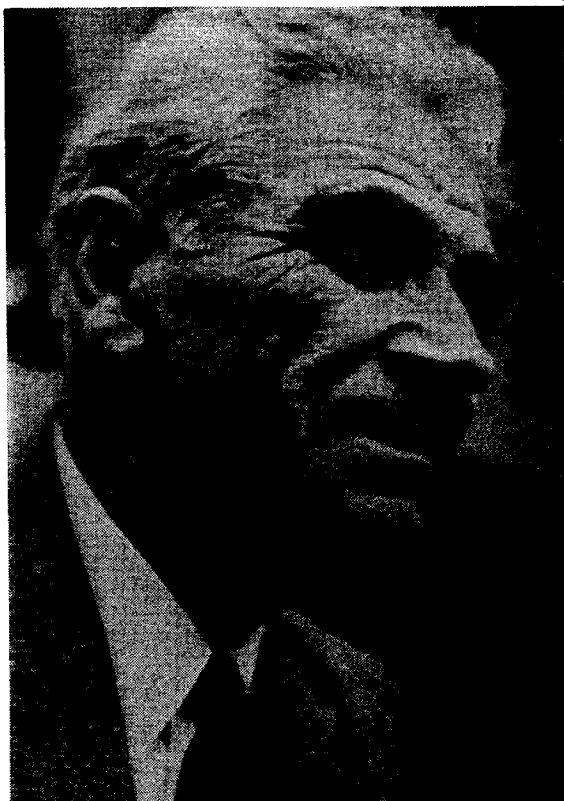
まことに残念なことだったが、ロジャーズ声明を掲載した全世界の新聞が訂正記事を出さぬ限り、この打撃のキズは容易に癒えぬだろう。

しかし悲観する必要はない。アダムスキー型 UFO は今もなお世界のどこかに出現し続けているし、地上の愚劣な騒動とは無関係にスペース・プログラムは整然と続行されているだろう。プラザーズは宇宙の法則や真理を全く考えようとしていない大部分の地球人よりも、少数ながらも宇宙的なフィリングを持つ「特殊な人々」の活動のみに注目し、これをひそかに援助して、激動の時代にそなえていることだろう。

# 進歩した 思索家の ために

(1)

ジョージ・アダムスキー



本記事は一九五五年五月四日、米ミシガン州デトロイトにおいて或る民間UFO研究グループのために行われた非公式講演である。かなり古い記録であるが重要な内容を含むので、数回にわたってその全文を紹介することにした。テープ録音のトランスクリプトを贈られたアリス・ポマロイ女史に深甚の謝意を表する次第である。

編者

## 一プラス二は三

宇宙には二種類の数学があります。一つは「一プラス二は三」というもので、もう一つの大自然界の眞の数学は「一プラス二は三」というものです。皆さん方はこれをお笑いになるかもしれませんが、笑う前に考えてみてください。なぜならこの数学が眞実でないとするれば、あなた方は両親の娘または息子にならなかつたからです。二つの力が一体化するときはいつも、一つの現象を生み出します。ちょうど電灯の光と同じです。二つの極が一体化すると閃光が発生し、一つの現象が存在します。これでもって、私たちは自然の方法を応用することよりも自分たちで作上げた方法の応用の仕方が数学的に間違っていることがわかるでしょう。自然界において雷光が起るとき、二本の熱い鋼線の如き二つの力が交錯するのであって、その結果、閃光を発生します。互いに分離して独立している二つの極がなければ電灯光が得られません。しかもこの二つの極は互いに一体化してこそ家庭で用いるような光を生み出すのです。

したがって万物は三位一体です。そこであなた方は、だから宗教の分野に「三位一体」が入るのだと言いかもしていません。三位一体説は同じ源泉から出ています。「父」と「子」が一体化するとき、——と三位一体説では言うのですが——両者がそれぞれ個々の力を持つのではない、一体化された二重の力、すなわち「聖霊」を持つことになるのであって、それは三位一体なのです。聖霊とは実際には力を意味します。

人が私に尋ねます。「あなたは神智学信奉者なのか、バラ十字会員なのか(訳注)バラ十字会とは十七、八世紀にヨーロッパにあった神秘主義的秘密結社)、それとも何かのオカルティストなのか」と。私は眞理を語れるような人間ではありません。私は今までいかなる宗教団体に属したこともなければ、いかなるオカルト団体からもただ一つのレッスンを学んだことはありません——全然ありません。自分を団体化しようと思えばできます。「空飛ぶ円盤実見記」を出したために、現在私の背後には二千万の人がいます。世界中からぼう大な手紙が来て、「団体化せよ」と言っていますからそのことが証明できます。しかし私は団体というものを信用しません。「協力」ならば信用します。団体は発足する前から限定された状態にあります。団体化すると必ずだれかが干渉してきて、いつかトラブルが発生し、努力した結果は失敗です。一方、協力を得るならば——これこそ眞の理解なのですが——正しい方向に動くことになります。だから私は団体に

化しないのです。しかし各種の団体は円盤と別な惑星から来る訪問者に関する真実を広める責任があると思います。政府はこれをやろうとは思いません。これはカトリック教会、プロテスタント教会、英国国教会のような大宗教団体ならやれるでしょう。これらの教会が円盤に関する声明を出せば、世界のほとんどの人が認めるでしょう。その声明は人々の崇敬的になるからです。もし政府がやればその声明は敵意を含んだものになるでしょう。したがってどれかの宗教団体が円盤問題を取り上げてくれることを願っています。今、そのチャンスがあるのです。

一九五四年十二月下旬に、バチカンのカトリック教会から私宛に質問状が届きましたので、その回答をすぐにバチカンへ送りました。それはたしかに（円盤問題に）関心を示すものでした。多くの教会が関心を示すようになっていきます。最近、ロンドンからやって来た英国国教会の監督が、円盤と宗教との関連を知るために、私の家で共に数時間をすごしました。回答を与えると彼は「これは緊急を要する。至急にカンタベリー大監督のところへ帰らねばならない」と言います。数日後、今度は毎日曜日にラジオで放送している「放送教会」の人たちが訪ねて来ました。彼らも質問して大変な興味を示しました。これらの教会の一つでも円盤問題を取り上げてくれれば、私たちが真相を広める際に直面している困難は解消するでしょう。そうなれば政府もそれに従うでしょう。

最近メキシコ市へ行ったとき、そこで

はすでに政府がやっていることを発見しました。メキシコ政府は円盤問題に関する事を大衆から隠そうとは思わず、すべてを発表しているのです。メキシコは米国よりもカトリックの信者の多い国で、教会は大災害が来るぞと声明して、それ自身の立場をとっています。そこで恐怖心のために人々はどうしようかと迷うわけですが、一方、政府は真相を発表してそれを打ち消していますから、大衆は選択できるわけですね。メキシコ人はアメリカ人のようにわけのわからぬ状態にされていることはありません。

### 友星人の相違点

私は今このカバンの中に、パロマー天文台の百インチと二百インチ望遠鏡のオペレーターであった故ハブル博士の声明文を持っています。これはフィラデルフィアの哲学教会で行われたものです。博士の説明によりますと、地球と全く同じ気候、同じ大気、その他あらゆる点で同じ面を持つ惑星が宇宙空間に無数に存在するという事です。百インチ望遠鏡自体が大気圏外にこのような惑星を百万ないし三千六百万個発見したと述べています。その場合の平均化の法則は、地球だけが宇宙空間で人類の住む唯一の惑星であるという考え方に反しています。したがってあらゆる事が私たちが学びつつあるという状態を示しており、私たちが全く同じように飲んだり食べたり、子供を持つたり、家事仕事があったり、その他いろいろな仕事を持つたりする人々が他

の惑星（複数）にいてという状態を示しています。ただ違うのは、彼らはすべての物を他人に等しく分かち与えることを学び知っており、そのために各個人に負担がかかるのではなく、万人に等しくかかるのであることを知っているという点にあります。これが大きな相違点ですが、しかし彼らはやはり私たちと同様の人間なのです。彼らが私たちに教えるに來るのは、人間がこの地球上に存在するとき、人間はただ生きるということだけではなく、他のどこかでもつとやるべき仕事があるということなのです。彼ら（他の惑星の人々）の来訪はこのことを証明しています。それはいかなる宗教が与え得たよりもっと適切な証明です。

彼らの進化の程度、すなわちいゆる精神性に関する限り、訪問者（他の惑星の人々）は私たちよりもはるかに進歩しています。しかし彼らは私たちと同様にやはり精神的だと言えます。なぜなら、私たちも精神性というものを認識できるほどに一応精神的存在です、それを生かしているからです。それを生かすことが主な部分なのです。訪問者たちは、私たち以上に自身と宇宙との関係を自覚しています。しかも彼らはそのような生き方をすることによって実行しているのです。

### 状況の分析は必要

先ほども申しましたように、私は神智学信奉者でも、バラ十字会員でも、その他いかなる団体の信者でもありません。

私は八歳のときにチベットで勉強しました。父が私の望まなかつた僧にさせようとしたために、私はカトリック神祕派を選びました。以来、多くの哲学と宗教を学んできましたが、特定の宗教になじんだことはありません。あらゆる宗教から真珠だけを取り出して、ガラクタを捨てました。私はどの宗教をも非難するわけではなく、ただその分析をしているのです。だれしも人生で分析をする権利があります。実際、人間は自分の進路を知るために分析をする必要があるのです。目的の地へ到着しようとしてドライブしているれば地図を見なければなりません。このことは、ときとして少々でこぼこ道であるからとか他の道路よりもよけいに時間を要するとかいって道路を非難することの意味するものではありません。非難や分析はときとして誤ることがありますが、しかし状況の分析は理解のために必要な事です。非難はあくまでも非難にすぎません。

宗教の場合も同じことが言えます。私はカトリックの教えに従えば多くの負債があることを知っています。もしその負債を負えば、神が自分でそれをやるでしよう。この点をもっとはっきりさせてみましょう。私たちは、神はすべてのすべてであり、万物を包容し、神の外側には何もないと教えられています。私たちが人間はひとかどの存在であることを認めています。さもなくばここにいないでしよう。そうすると、もし私たちがひとかどの存在であって、神の外側には何もないということになれば、私たちがどこ

にいるのでしょうか？ 私たちは神の内側にいるにちがひありません！ したがって私たちの一部が地獄へ行くならば、神も一緒に地獄へ行くでしょう。神が私たちを創造するまでは地獄は創造されないのでしょう。(訳注)地獄とは人間の創造にはかからないの意)

さて、いわゆる「進歩した」教えに近づいてみましょう。たとえばバラ十字会を例にあげますと、同会は白と黒の友好精神が存在すると言っています。しかし神の心の中には白も黒もありません。神の心は白でも黒でもなく、それはただ存在するのです。人間が創造主の好みに関して創造主を非難するならば、人間は創造主に最も近い創造物でもって創造主を非難することになります。太陽が一つの例です。月は別な創造物です。太陽は人間が何を信ずるか尋ねますか？ 昨日がどんなに良くない日であったか、今日がどんなに良かったかと、人間の体を温める前に尋ねますか？ そんなことはありません。太陽は万人に等しく輝きます。太陽はえこひいきをしません。自然界は万物に関してみなそうなのです。

### 物質は知性を持つ

次にクリスチャンサイエンスをあげてみましょう。ここでも同じような非難をしています！ クリスチャンサイエンスは物質は知性を持たないと言っていますが、物質は知性を持つのです。あなた方は、自分自身ではないところの自分の肉体を起き上げようとする場合に、も

し肉体が何らの知性も持たないとすれば、果たしてその肉体が起き上げられると思いますか？ まず、だめでしょう。この場合、おそらく肉体は自分のエゴが持っている以上の知性を持っている証拠があります。あなた方が食物を食べるときその食物の内のどれほどが栄養分として体内にとどまらねばならないか、どれほどが廃物として排出されねばならないかを、知っていますか？ 食物を食べてもそれはわからないでしょう。ところが、胃の中には小さな仲間がいて、それが化学者となり、食物が胃に達するや否や、そのエッセンスを抽出し始めます。もしリンゴを食べればこの化学者たちが必要な量のエッセンスを抽出して、それをただちに全身に配分するでしょう。もし必要以上に食べれば、彼らはそれを棚の上に置いて貯えるでしょう。残りの物は廃物として捨てられるでしょう。そこでおわかりのように、肉体がどのように働いているかを自分以上に知っている「人」がいるのです。その「人」は、自分がストレスや緊張を加えようとも、毎日のようにあなたの肉体を生ける物にしているのです。それで認めねばならないのは、人間の肉体の内部には本人の顕在意識を超えた一種の英知が存在するということであり、それは本人の心を知っていることよりももっと多くの事柄を知っているという点です。ところがクリスチャンサイエンスは物質には知性がないと言っています。これでは意味をなさないではありませんか。

### 自然が病を治す

今度はユニティー(一体性)とその実体について調べてみましょう。ユニティーとは美しい言葉です。しかし人間は相关性なくして、どうしてユニティーを教えることができるでしょう？ 人間は物事の相関的な理解を持たねばなりません。「この事」が「あの事」となぜ、どのようにして、関係があるのか、を知らねばなりません。行為の正常な働きと調和ある働きを理解するために、行為のあらゆる面を理解する必要があります。宇宙と調和して働かない唯一の物は、「人間」です。人間が全く理解しないからです。こうなると、人間が相関性を教えるためにユニティーを持ち得ないことがわかるでしょう。彼らはある結果を得ますし、みなそうしているのですが、私はこんな事を知らなくても結果を得ることができます。

さてクリスチャンサイエンスに戻って、治癒の問題を考えてみましょう。ある人は良き結果を得たと言って、その問題を話し始めるでしょう。多くの奇蹟的な治癒を得たでしょうが、一方、彼らは多くの虐殺もやっているといます。多くの人が病院へ行つたとしますと、彼らは完全には治らないでしょうが、やはり生きているでしょう。ところが、私たちが治療師になれるのです。実際、私は治療をしました。私の場合は病人に向かつて「あなたの苦しみは私が引き取った」と相手に信じ込ませることによって、相手

の苦痛をやわらげただけなのです。ひとたびこの事が起こると、あとは「自然」がやってくれます。これが問題のカギであり、真理なのです。人間は心の平安さえ持ち続けるならば、正しい結果が得られるのです。これは心の問題についても同様です。治りさえすればよいのです。ところが、このようにして治した個人的な功績の多くは自然の力だということにされています。

### 宗教はダメ

人間が基本的な法則に従わぬ限り、理解力の欠乏から起こる破滅的な状態から自分を自由にはできません。原爆によるこの文明の破壊からも逃れることはできないでしょう。これは無理理解によってすでに起こっています。人間は自分を絶滅させることを望んではいけません。悪魔がそれ以上の事を知っているにしても？ もし悪魔が自分の地獄を絶滅させたと思えば、自分の支配する物がなくなるでしょう。私たちは今日世界に存在するあらゆる苦悩を各種の宗教団体に押しつけてよいでしょう。なぜなら、あなた方も私も終日一生懸命に働いていて聖書に没頭する余裕はなく、聖書に打ち込んで日曜日に真理を伝えてくれるとおぼしき人がいることを認めているからです。ところが聖職者は彼自身や生活を永続させているだけで、政策上バカげた事をばかりを伝えていくすぎません。私たちは実際は、政府よりもむしろ宗教によって、圧迫を受けているのです。



## 人間自身が真理

人間自身が「真理である」ということを一体どれだけの人が知っているでしょう。人間はどこか遠い所に「真理」を求めています、実際には「人間自身が真理である」のです。人間の実体を知っている人が一体どれだけのいるでしょう？大抵の人は他人が知っているのと同じほどに自分のことは知っています。まず人間は眼を持っていることを知っています。たとえば人間はジツとこらえたりいらいらしたりしますので、肉眼によって相手の心の状態を知ることができます。第二に、人間は耳で聴くことができ、話すこともできますので、聴いたことを話すこともできます。三番目に人間はだれも同じ匂いを嗅ぐこともできます。四番目に人間は味わったり食べたりすることもできます。以上は人間が「人間」として知られる四つの主な表現径路です。もし人間がこれらを持たねば別な生き物と呼ばれるでしょう。したがって、人間が「人間」となる所以はこの四つの表現径路、すなわち四つの感覚器官なのです。もし人間がその四つの感覚器官を持たなかったならば、人間は別な動物になっているでしょう。したがって人間であるのは、この四つの表現径路を持つからなのです。

私たちは一匹のハエが室内の床にとまっても、それを雷鳴の轟きのように感じます。この部屋の中に一千人の人を座らせることにしましょう。そうすると二千個の眼が存在することになります。そこで私は床の中心を歩く人間として三次元の形態物を投影しましょう。あらゆる眼がそれを見ますし、あらゆる耳がそれを聞くのですが、このように言って反対するでしょう。「もしだれかがその床を横切ったとすれば、特にこんなに物音のよく聞こえる床ならば、その足音が聞こえるだろう」。そこで感覚器官同士の間でケンカが起ります。一方、もし私がその床をだれかが横切る音を聞いたとすれば、私の耳は次のように言うでしょう。「だれかが床を横切る足音を聞いたよ」。しかし眼は言うでしょう。「そんなことは無い。そうだとすれば人影を見たはずだ」。そうなるのと二つの感覚器官が争っていることになりました。他の感覚器官も同じように争うことでしよう。さて、あなた方を形成しているいろいろな性質がお互いに尊敬し合わない場合に、どのようにすれば他を尊敬し合うと思えますか？

それは各感覚器官が互いに尊敬し合っていることを学ぶ必要があるのであり、そのときこそ、人間は自分のマスターとなつて、真に自分自身を知ることになるのです。これこそ私たちが生誕の日から与えられた真の権利なのです。パイオリンの四つの絃でもって天国のようなメロディーを人間が演奏できる日こそ、各絃が互いに調和したときなのです。これこそ今日の最高の教育でも教えられなかった事柄です！

## 信念が重要

イエスが悪魔と称される人物に会つてその悪魔が自分の持つあらゆる富をあなたにあげようと言つた件を読んだことがあるでしょう。そのときイエスは何も言わないで、ただ相手の言葉を聞いているだけでした。悪魔がそれ以上言う言葉がなくなつたとき、イエスは相手を非難しませんでした。悪魔はできるだけのことをやつたのです。それ以上のことはできなかったのです。しかしイエスはこの事を悟つて、言いました。「悪魔よ、私について来なさい。私はあなたについて行きません。あなたは限界に達した。しかし私は無限の道を知っています」。イエスは悪魔の申し出を非難することはない、自分について来いと言つたのです。もし悪魔がイエスに従いさえすれば、イエスは差し出した物よりもはるかに大きな富を得たことでしよう。イエスは悪魔の申し出をはるかに超えた真の富が自分の前途にあつたということを見抜く信念を持つ必要があつたのです。たしかに人間は信念を持つ必要がありますが私たちが教師はそんな信念を持っていません。

れば何も得ないと聖書が言っていることを理解するほどに発達しています。慈悲心というのは信念と関係があります。人間は固い信念を持たない限り慈悲心を持つこともできないのです。自分が持っている最後の一寸を自分以上に必要とする人に与えるだけの慈悲心を持たなければなりません。そうすれば自分も助かるのだというものを理解するだけの信念を持つ必要があるのです。これこそ信念に基づいた真の慈悲心であつて、イエスはこれを知らなかったのです。

ここでむづかしい問題が起つてきます。この世には立派な指導者がいますけれども、人間は自分が知っている事以外に何をどのようにして教えることができるかという問題です。しかも人間の信念はイエスの信念をはるかに下回りますので、人間の教えはイエスの教えを下回ることにあります。ところが、ある程度は良き教育機関があるので、良くも悪くもないという程度でしよう。いずれにせよ役に立たない団体というものはこの世に存在しません。しかし絶対的な真理を望むのならば、深く掘り下げて行く必要があります。

これは十二の先端（とがった先）を持つ星であらわれます。人間は常に五つの先端を持つ星——五つの感覚器官——で表現されています。もっとも私は四官しかないと言っているのですが——。また人間は医学で言っているように、脊椎の底部から人体の頂上部にかけて神経中樞と呼ばれる感覚器官を持っています。聖書ではこれは「七つの教会」または、

## 慈悲には信念を要する

人間は天使の言葉を借りて話すだろうし、自分の生命を見放すこともあるだろうが、もし慈悲（または愛）を持たなければ

慈悲には信念を要する

「七つの聖霊」と言われており、ヒンドゥー教では「チャクラ」と言われていいます。太陽神経叢(胃の後ろにある神経節の中心)の下に三つあって、この三つのチャクラは地上の現象を象徴し、手足や生殖器をコントロールします。太陽神経叢の上には更に三つのチャクラがあってこれらは心や魂や精神をコントロールします。しかしいずれのチャクラも太陽神経叢と呼ばれるチャクラから力を受けています。太陽神経叢は私たちの太陽系の太陽を象徴するもので、これでチャクラは七つとなり、これ以外の五つのチャクラと合わせて全部で十二になるのです。(訳注)太陽神経叢が人体に宿る宇宙の意識・パワー・英知という意味ではない。宇宙の意識は髪の毛から爪先に至るまで人体に充滿している。太陽神経叢はパワーを配分する変圧器の如きものであると考えられる)

### 生活費を心配するなかれ

さて、これら十二のチャクラの上位に支配的な力が存在します。それは宇宙の力であり、これを救世主と考えてよいでしょう。しかし名称そのものは意味をなさないもので何と呼んでもかまいません。「救世主」という語は実際には宇宙の意識から出たもので、神の意識の一部分を意味します。その極小部分が一人の光明と仰がれる人です。だからイエスは次のように言っています。「私はあなた方にミルクを飲ませるが肉は食べさせない。あなた方はキリストの赤ん坊であるから

だ」。十字架上のイエスは実際は十三番目の人です。彼は十二人の使徒を含むグループの十三番目の人でした。十二使徒というのは十二のチャクラを象徴しています。しかしまだ知らねばならぬことがあります。カトリック教会の三位一体像の上に二十四人のキューピッド(天使)が見えます。また仏教でも同じような象徴があります。両側に十二の腕を持つ像のまわりに二十四人の長老がいます。これらはみな同じものなのです。

しかしここでは指導者として十二人とどめておきましょう。人間はキリストを不朽のものとし、その程度だけでキリストについて教え、それ以上に進みません。なぜでしょう? それは、もし人間がそれ以上に進むならば、生活と呼んでいる物質的な快楽をあきらめねばならぬだろうと思っているからです。たとえは、福音を伝えようとして出かけて行った七十二人の使徒がいたのですが、彼らは家族を裕福なままに残しておきました。しかし数カ月後に帰ってみると家族は貧しくなっていました。食物などはないので。そこで帰って来た使徒たちは自分たちは神に仕えるために出かけたのに、神は自分たちの家族の世話をしてくれなかったと不平を言って、それ以上は伝道の仕事を続けようとしません。それで聖ステパノは難儀な思いをして彼らを説得し、大いなる信念をもって出かけよとすすめました(訳注)ステパノはリベルテン会堂派の奸計におちいって石で打ち殺された最初の殉教者)。そこで

彼らもやつと納得して再度伝道に出かけて行きましたが、今度帰ってみると家族は裕福になっており、貧しくはなかったのです。

### 創造主がみてくれる

指導者としての私たちもこれと同じ事で不安になっています。私たちはそのような堕落の機会をつかむことをきらっています。お金やすてきな自動車が心地よく見えるからです。これらすべての報いを受けている貧しい人は、ポロ自動車さえ買えないために歩かねばならない、人生の探求者です。私たちは他人の欲望やまじめさに頼って生きている。姪のようなもので、しかも自分自身を指導者と称しています。イエスは悪魔が提供した物で中断はしませんでした。それどころか、その線を超えて前進し、別な意味での富を悪魔に提供しました。あなた方は「こっちの方がよさそうじゃないか」と思っても、なおかつその線を超えて前進しなければなりません。あなた方は信念に基づいて、その線を超えて精神的に生長しなければなりません。その時点から創造主があなた方の世話をやいてくれることを知りなさい! 心配する必要はありません。そのようにやりさえすればイエスがやったようにやれるのです。「父」の中に没入しなさい。そうすればあなた方は神の座のまわりに、十二人ではなく二十四人の長老を持つことになるのです。この場合の十二人の使徒は地上の象徴であり、精神的な面であるもう一

方の部分に達するとき、バランスがとれることになります。そうなる、地上で十二人の働き手を持つことになり、天国で十二人を持つことになります。

### 重要な真理とは

ここでひとつ重要な真理をお伝えしましょう。これは金星人が理解していることで、彼らが私たちよりも進歩している理由でもあるのです。カトリック教会もこのことを理解しています。あなた方の多くもこの真理を聞いたことがあるでしょう。あらゆる物事を研究するのは良いことです。それは人生に満足しない自分分をより良くしようとする人にとって履修単位となります。

さて創造主の王国へ入るためのその真理すなわちカギは、マタイ伝の十六章に出ています。イエスが少し旅に出て帰ったとき、彼は弟子たちに尋ねました。「人々は人の子をだれだと言っていますか?」彼らは、人々は異なる予言者だと言っていると答えました。それでイエスは人々がまだ自分をだれだか知っていないことがわかったのですが、今度は弟子たちに直接尋ねました。「あなた方は私をだれだと言いますか?」一同がだまっていますとペテロが答えました。「あなたは生ける神の子、キリストです」カギはイエスの次の言葉にあります。「このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいる私の父です。私はこの岩の上に教会を建てます。地獄の門もそれには打ち勝てません」



このときイエスは天国へのカギをペテロに手渡したのです。カトリック教会がペテロがカギを握っていると言う場合は、真実を言っているのですが、ただ教会はどんなカギなのか、どうすればあなた方も入手できるかは言っていません。さあそれはどんなカギだと思えますか？

出席者の質問「あなたは今ローマカトリック教会が真理を知っていると云われましたが——」

この場合私が言ったのは、それはカトリック教会へ与えられたのではなく、世界に与えられたという意味なのです。イエスの時代にはカトリック教会はなく、あったのはカイバの教会です。カイバはイエスを磔刑にした責任者ですが、後にカトリック教会がコンスタンチンに建てられたとき、彼はその真理を自分の教会に取り入れました。だからそれは真理なのです。

### カギはこれだ！

カギの問題に戻りましょう。あなた方は天国が何を意味するか知っていますか？ 天国とは「原因」を意味するのです。天国は人間によって見られるものではなく、それは「結果」を生み出す「原因」なのです。それは眼に見えない状態であって、その状態から眼に見える物が出てくるのです。私たちはそれを認識するほどに謙虚にならなければ、真理を見ることはできません。それは天の王国と呼ばれています。「原因」の王国であるからです。善や悪や無関係な事柄

の何にせよ、結果が出てくる前にまず原因が存在しなければなりません。それが第一に存在しなければなりません。しかし結果が生じるまでは決して眼に見えません。たとえば多くの画家は心の中に美しい絵を描きますが、これは「原因」です。次にキャンバスまたは壁にそれを描くと「結果」が生じることになります。

ときとして画家は心に描いたほどの美しい「結果」が出来上がらないために、ひどく失望することもあります。あなた方は街路を歩いたり森の中を散歩したりして、樹木のあいだにただよっている「生命」そのものを実際に見ることができますか？ あなた方には見えるでしょうか。そしてもし見えるとすれば、真実の宇宙の法則を扱っているのです。あなた方はそのことを大変うまく理解しています。

人間が犬を傷つけようとしているか可愛がろうとしているかを知らうとして、犬はそのことを話してもらう必要があるでしょうか。そういう必要は全然ありません。犬は人間が何をしようとしているかを知っています。しかしそこには眼に見える伝達経路は存在しません。犬は人間が失ってしまったこの伝達経路を持っているらしいのです。イエスがペテロに言ったのは次のような意味だったのです。「原因を見るようにしなさい。なぜならこの眼に見えないものから眼に見えるものが出てくるのだから——。それこそ真の道です」

しかし人間は自分の想念の中に天国を思い浮かべるときでも、眼に見えるものを崇拜することを学んできました。それ

がどこかへの脱出口であると考えてそれが（眼に見えるもの、すなわち物質）いつもここにあるのに、手を伸ばしてそれをつかもうとしています。

### 天国は自分の中にある

ここに一例があります。ある日一人の牧師が私の所へ来て言いました。「ジョージ、君は間違った道を進んでいる。君は迷える人間だ。それで君を救うために祈ってあげることを話そうとして五十九マイルをドライブしなければと思っただ」

私は相手の配慮に感謝しました。つまり、私のような人間でも救われる価値があると相手が考えてくれたからです。そこで相手に尋ねました。

「全然迷ってはいないものを、どうして君は救えるのかね？」

相手は私が神の冒瀆者だと思ったというのです。これは最初に私のような質問をすれば、彼らのすべてから返ってくる回答です。それで私は続けました。

「君は神がすべてのすべてだということや、神の外には何もなく、神こそ全包的だということをお教えているのか？」

「教えているよ」と相手。

「よろしい。私が正しいか間違っているかを君がわざわざ見つけようとしたときこそ、君は私を『ひとかどの人間』と考えたわけだ。私がひとかどの人間であって、しかも神の外には何もないということになれば、私はどこににいることになるのかね？」

私が迷える人間であるはずはないし、天国からはずれていくわけもありません。やはり神の内側にいるのです。そうです。私たちは外側にある天国をつかみ取る必要はありません。それはすでにここにあるのです。私たちはそれに気付く必要があります。形があるように見える物は、一時的な仮の姿にすぎないことに気付く必要があるのです。形ある物は去来しますが、その物を生み出す力は永遠なるものです。ひとたびこのことに気付けば、私たちは真理を把握したことになります。これこそイエスがペテロに対して意味したことなのです。しかし当時はまだこれを受け入れようとはしませんでした。パリサイ人やカイバの教会はイエスが教えた事を認めませんでした。イエスがローマ帝国によって磔刑に処せられたというのは誤った考え方です。十字架上で彼の生命を要求したのは教会なのであって、その教会は当時の教会の高僧であったカイバです。それは当時存在した唯一の教会です。カトリック教会がカギを握り、それを彼らの宗教に取り入れたのですが、実際は、カトリック教会に属しているようがいまいが、そのことを考えることのできる人すべてのものなのです。

（以下次号）  
久保田八郎訳



# 人体極性と重力場エンジン



山梨大学宇宙エネルギー研究会

唐沢宏之

中世における生命エネルギーの科学者の多くが、そしてヨガの科学が人体に極性のあることを指摘している。そしてそれが磁気性の極であると説明している。その極は頭部及び陰部に存在して、その二カ所が人体という一つの双極子体を形成しているという。この知識は現在までさまざまな形で応用されてきたらしいが一般化されてはいない。また宇宙人からも同様な指摘がなされているようだ(注1)。しかも人体の両極はスピンの極であるとのことである。スピンの磁気とはある一定の関係で結ばれていることが知られている現在、地球における研究の「磁気性の極」という表現も妥当であったことがわかる。スピンの極ならばそのバックグラウンドとしてエネルギー流が「回転」していなければならぬが、これも事実のようで腹部の周囲を回転しているという。

さらに円盤の動力に関して宇宙人が説

明した重要な内容であるところの「円盤の動力のポイント」は「共振電磁場の制御装置にある」

「共振電磁場は生命の基礎に重大な関係がある」(注2)

という内容、及び宇宙人の円盤メカニズムの磁気性に関する説明(注3)を加味すると、人体極性と円盤の構造との間に下図のような類推が成り立つことが可能だろう。

では、この「磁気的な力」と「重力(制御)」と「人体(極性)」との間にはいったいどのような関連が見い出せるだろうか。

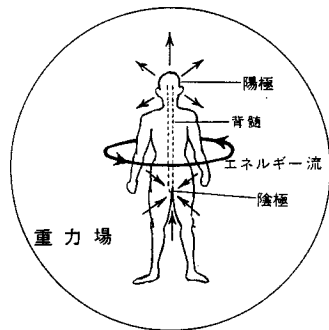
古代文明の研究で有名なJ・チャーチワード氏と会談したインドの隠者リシーは次のように言う。

「人間はいわゆる重力を越えた振動を生み出し、その影響を無にすることができ。人間を地上に引きつけているのはこの磁気力だけなのだ。磁気力が無に帰せば、人間の身体は実体となり、実体そのものには何の重さもないから彼は自分の体を浮かび上げさせ、空中を飛ぶことができる」(注4)

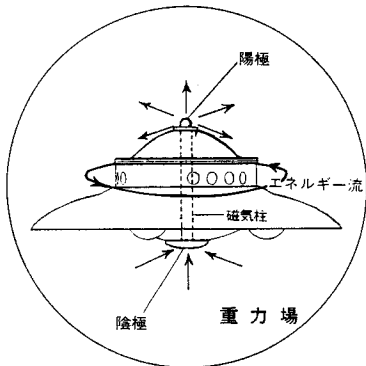
人体の空中浮揚の例はいくつか報告されている。

また、人体の極性はその死とともに消失するものと思われるので重力場も消失するだろう。

なぜならば、前述の文献にあるとおり「共振電磁場は生命の基礎に重大な関係がある」のであり、またダニエル・フライ氏と会見した宇宙人の説くように「……もしこの二つのフィールド(電場



重力場



と磁場)がお互いに共鳴したら、ベクトルフォースが生ずるだろう。……ベクトル場は重力場に似た効果を生じ、実際には同じものなんだ」(注5)

という理由による。

こうして死と人体重力場の消失を考え、てみると、それは「死に伴う身体重量消失」という貴重な実験報告を想起させる。これは臨終の人間を精密な秤台にのせておくと、死の瞬間において、考えられるさまざまな要素を除いてもまだ余りある重量の消失が観測されたというものである。

同時にまた「死の瞬間における生命エネルギーの身体からのリリース(放出)」も重要な関連性があるように思われる。これは足の爪先等から炎の如きものが空中に放散してゆくという内容である。

重力場エンジンと生命工学(機械に生命性を付与することを目的とした工学)との結びつきがこのあたりにありそうである。

以上の事から「磁気的な極性」の存在するところには重力場が存在するであろうという推測が成り立つし、それゆえ人体極性を中心とした生命エネルギー研究の超心理エキスパートの側から重力場エンジンが提示される可能性すら考えられるのである。

注1 清家新一「宇宙の四次元世界」大陸書房

注2 G・アダムスキー「空飛ぶ円盤同乗記」高文社

注3 D・レスリ「空飛ぶ円盤実見記」高文社

注4 ダニエル・フライ「TO MEN OF EARTH」日本G.A.

注5

<連載> 米国GAP本部訪問記 (1)

第1部

きらめくビスタの星

久保田八郎



○カリフォルニア州ビスタの米国GAP本部

一九七五年十月三十日に羽田を出発して半力月の米出国出張旅行に出た編者は、翌三十日にロサンジェルスに到着、バスでカリフォルニア州を南下し、三十一日より十一月二日まで三日間、ビスタのGAP本部を訪問して、アダムスキーの高弟であったアリス・ウェルズ、マーサ・ウルリッチ、フレッド・ステックリング、同夫人イングリッド、ステイヴ・ホワイティングらに会い、アダムスキー問題に関する貴重な情報や資料を入手した。更に十一月二日はパロマー山でもアリスが経営していたパロマー・ガーデンズの喫茶店跡を見学、ア氏が建てた物置小屋等を見て、万感胸に迫る一刻をすくし、多大の収穫をあげたあと四日にニューヨークへ飛び、六日にはマサチューセッツ州ノースポロに住むア氏の高弟アリス・ポマロイ女史宅を訪問、三日間におたつてア氏関係の詳細な情報を与えられ、大成功裏に十一月十四日羽田へ帰着した。絶大なご援助をたまわった関係者各位に厚く感謝する次第である。

本記事はその詳細な報告であり、多数の写真とともに珍しい情報を公開することによって読者に裨益すれば幸いでである。

全篇を第一部「きらめくビスタの星」第二部「青きパロマーの空」、第三部「らばニューイングランド」の三部に分けて数回にわたり連載の予定である。掲載写真はすべてカラーで撮影したものであるが、本誌には費用の関係で残念ながら白黒写真としたことを了解されたい。

× × ×

雲一つない紺碧の天空が限りなく展開して万物が陽光のもとに燦然と輝く美しい南カリフォルニアのこのオーシャンサイドは、棕櫚の木が点在する太平洋岸の小さな町で、ロサンジェルスから急行バスで三時間半の平和な地域である。土地の広い豊かな国のせいも、家はまばらで日本のように大小の家屋がぎっしりと立ち並んだせま苦しい感じは全くない。

十月三十日の午後二時半にロサンジェルス空港に到着した私たちは（羽田空港を出発したのも十月三十日の夜だが、米国は一日遅れるので、翌日彼地に着いたのも同じく三十日である）午後五時すぎにロサンジェルス市内からグレイハウンド・バスで沿岸のハイウェイを南下し、夜の八時すぎにオーシャンサイドの小ホテル、ロイヤル・インに到着して部屋に入ったときは、これでやっと目的地まで来たという安堵感でいささか拍子抜けした状態であった。といって、いきなりベッドにひっくり返るのは私の好みではない。しばらく椅子に腰かけて、あわただしい二日間を回想した。

室内外は静まり返って物音一つ聞こえず、室内の様式も全く日本のホテルと異なるところはない。どだい異国へ来たという緊張感が起こらないのだ。そういえばロサンジェルス空港で飛行機を降りてすぐに入った税関でも日本人の係員が数名いて日本語で案内してくれたので、ここは羽田空港の一部ではないかと思つたほどだが、税関の奥の白人官吏が私のパスポートを見て「何日米国に滞在するつもりですか」とか、私の返答に対して

「よくいらっしやいました。この国で十分に旅行を楽しんで下さい」という歓迎の言葉も全然奇異な感じがしない。なにか遠い故国に帰って来たような気がして仕方がない。そうだろう。超能力者の透視によると、私は過去世においてアメリカ開拓時代に西部で活躍した生涯があるということだから、その意味では本当に故国に帰ったのだらう。正直な話、これは私にとって最初の海外旅行なのだが、多少は語学をやっていたせいもあるのか、どうも日本内地にいるのと変わりはなない。ロサンジェルス空港からタクシーで市内へ飛ばしたが、この運転手はブルトリコ人だということで、かなりスペイン語なまりの強い英語で話しかけてくる。あんたは日本人か、自分はロスへ

来て十年になるが、ロスは空気がきれいで、いい所だ、自分はここへ来てよかった、とかなんとかしやべっている。空港の郊外へ出ても風景は羽田空港の近辺と大差はない。ハテ、ここはアメリカなのかいなと同行の堀君と話し合っている。と、やがてロスの市内へ入って行った。

この旅行は私が経営するニニバス出版社の出張旅行であり、本来の目的は米国で出版されているUFOと超能力関係の図書や資料を大量に仕入れに行くことであつた。したがって私の旅費一切は会社から出ているが、この計画を発表するや、GAPメンバーで社員の堀公明君が自費で行くからぜひともアシスタントとして連れて行ってくれと言ひ出したのである。どうせ行くならカリフォルニアの

#### ●ロサンジェルスにて



米國GAP本部に立ち寄ってアダムスキー関係の資料を徹底的に調査し、かつての高弟たちと会って心ゆくまで話し合いたいのだということを決らしたところアダムスキー問題にすぐ熱心な同君が熱烈な意欲を示し、休暇だけを与えてくれ、旅費は自分でまかなうので会社に迷惑をかけぬと言う。社内の幹部会議で検討した結果、私も撮影・録音等で器材の携行が重荷となるし、その他アシスタント的役割を果たすに若者が一人ぐらいは同行する方がよからうということで会社も同意したのである。ただし同君は英語をやらないうえに（日本語もあまり話さない）、しゃべるのはもっぱら私の役目と相成った。しかしこれがまた私にとってこよなきレッスンとなり、沈黙主義者の同君が随伴したことはむしろ幸いした。もし日本語英語に練達の士が同行して、これみよがしにくだらぬことをしゃべりまくる、国辱的態度を示したならば、ウンザリしたことだろう。

さて、私は自室で一服やってからやお立ち上がり、米國GAP本部（正式にはジョージ・アダムスキー財団）へ電話をかけた。すると婦人の大きな声で応答があったので、アリス・ウェルズに話したいのだが、と言うと、すぐに別な声が出た。日本から来た久保田だ、明日そちらへうかがいたい、と言うと、たいそう喜んで待っている、すぐにフレッド・ステックリングに電話をかけて彼に明日ロイヤル・インへ車で迎えに行かせるよう連絡するから、少し待て、やがてフレッドから電話があるだろう、と言う。

ビスタを訪問することは日本を出発する前に連絡してあって、フレッドも私に会うのを期待しているという返事をもたらしていたのである。

ああ、これこそ待ちに待ったアリス・ウェルズの声だ。一九五二年十一月二十日、かの有名なデザート・センタールが最初に金星人と会見したときの六人の目撃者の一人で、そのとき双眼鏡でござながら金星人をスケッチした名高い婦人なのだ。かなり高齢と聞いていたが意外に若々しい声である。電話を切つて十分もすると今度はフレッドから電話がかかってきた。明日迎えに行く、ロビーで待っているか、と言うので、ロビーのチェックイン・カウンターの前で午後一時に待つと言ふと、必ず行くと言ふ。

「In front of the check in counter」と、はずんだ声で答えたあと、これで目的の大半を達成したような安心感とともに、「in front of」という昔少年の頃一生懸命に覚えた熟語がやつと役立つたなという奇妙な満足感をおぼえて、ベッドに入ったのであった。

ロイヤル・インの関連店であるらしいが日本のドライブインに見られるレストランのこときもので、駐車場を車をとめた白人の家族連れが三々五々入って来る。中はさして広くないが、椅子は二人がけのソファ式でゆつたりとして座り心地がよい。黒人のウェイトレスが「こんちは」と挨拶しながらメニューを見せる。その態度はきわめていいので、一見してわかる東洋人旅行客だといってバカにした様子はみじんもない。簡単な朝食をとると代金は一人一ドル九十セント（約六百元）で、中味を日本のそれと比較すると決して高くはないが、安くてかなわぬというほどでもない。まあまあというところだろう。タマゴをゆでタマゴにするか、半熟にするかというウェイトレスの質問は英会話書に出てくる文句と大体同じだが、どうも言葉の言いまわしが日本の英語教科書に出てくる表現と違う。そういうえは周囲から響いてくる他の白人ウェイトレスや客たちの会話も日本の英語参考書の英文などとはまるで違う。口語英語だからそれは当然だが、それにしても何というか、かなりくずれているようであり、もちろん発音は西部米語である。イギリス英語を東京弁とすれば、アメリカ英語は関西弁というのだろうか。文法は根本的に同じはずだが、きわめてやわらかく響く。私はまずこの言葉の点で興味深く聞き耳を立てた。

この頃から、ああ、やはりここはアメリカなのだといふ異国情緒がわき起こるのをどうすることもできなかった。窓外を見ると空は抜けるように青くて、小高い丘に散在する民家はマッチ箱のような平家であるけれども、外観は日本の近代的な民家と少々趣きを異にしている。しかし大差はない。豪壮な大邸宅というようなものはこの辺りでは見あたらぬ。

フレッド・ステックリングに会う

食事をすませて、まだ時間があるのでふたたびロイヤル・インへ引き返し、中庭のプールのそばへ行く。イン（inn）というのは英和辞書では「宿屋、旅館」などと出ているが、私たちのロイヤル・インやその後宿泊した他のインなどの様子からみると、アメリカではどうも小型ホテルで、一種のモーターのようなものらしい。しかし日本のモーターとは格段の相違があり、規模こそ小さいが立派なホテルである。だが、いわゆる大きなホテルよりは宿泊費が安い。こうしたことは日本で大体に研究してわかっていった。それでここに泊ったのである。旅客機やホテルの予約等は事前に日航を通じて全部手配しておいた。中庭には立派なプールがあり、デッキチェアなどが置いてある。

ここで暫時少憩して写真を撮ったりしたあと、一小时前にロビーで待っている、やがて車が来て、二人の男が入って来た。一人は一見してわかるフレッド・ステックリングで、他は見知らぬ若い男である。フレッドは「なぜ空飛ぶ円盤は来るのか」（文久書林刊）の著者で、かつてのアダムスキーの高弟として有名である。白人にしては少々背が低く、がっ

ちりした体格で、実にきまじめな顔付きをしてゐる。How do you do. So pleased to meet you. と私が言つて握手すると少々げんなりした顔をして You are Mr. Kurota? (あなたが久保田さんですか?) とあらためて尋ねるので Yes, I am. (そうです) と答えると、にっこり笑つて、じや行きましようかと外へ出て行く。彼が描いていたクボタ像が違つていたのかな、と思ひながら外に置いてある車に乗り込む。無理もない。本部へ送つておいた日本GAPの月例研究会の記念写真では私が弱々しく写つているが、眼前にいる私は彼の眼から見れば頭のハゲたダン腹の不骨な男なのだ。なんだ、こんな奴だつたのかと思つたのかも知れない。

さて、車は一路ビスタをめざして走つて行く。風景には別段目を驚かせるほどの変わった様子もないが、やたらとジュロの木が目立ち、小高い丘が多いのに気づく。しかし、のびのびとした開放的な光景はたしかに日本の地方とは違つた。とにかく面積の広大な国だ。遊んでいる土地がまだふんだんにあるのだな、ここらあたりで坪の価格がどれぐらゐかな、という想念がチラチラと去来したが、本部へ着く前にちょっと質問してみようという衝動にかられて、運転席にいたフレッドに話しかけてみた。

「ここでことわつておくが、わがよきアシスタントの瑞君は早速車をきかせて車に乗り込んだときからテープレコーダーを作動させていたらしい。あとで再生してみると、私がしよっぱなフレッドに発した質問からすべて録音してあつた。したがつて、この記事に出てくる会話はあとですべて録音テープを聴きながら忠実に訳したものであつて、ウロ覚えの再録ではない。テープレコーダーは日本を出発する直前に市場へ出たソニーの新製品で、いわゆる「カップブック」と同じ大きさ」といふキャッチフレーズで大々的に売り出したのを瑞君(私は日頃彼を「ハーさん」と呼んでいるので、以下そのように表記する)が購入して携行したのだが、実に優秀な機械であることが後日立証された。ただし内蔵マイクで録音するとモーター音も入るので、コードのついた私の録音用ソニーマイクを接続して使用することにきめていたのだが、彼は前部座席の背の上にマイクの先だけをのぞかせて、やつたらしい。

久「あなたはたしかメキシコに住んでいるはずですが——」

フ「メキシコ? いいえ、もうメキシコにはいません。今はここに住んでいます」

久「いつここに来たのですか?」

フ「約二年前です」

久「運転しながら話すフレッドの英語は、明らかにドイツ人らしい訛(なまり)が少しあり、どなるといふか命令口調というか、ちょっとときつい感じがする。少々沈黙してあたりの風景を見ながら行くと、「この道を行くんだよ」と助手席の男がフレッドに話しかける。

久「カリフォルニアは広いですなア」

フ「ここは広い土地ですよ」

久「驚きましたね」

この、驚きましたね、というのを私は「It is a surprise」と言つたのだが、この場合は「It is a surprise to me」と言う方が better だということを後日帰国して友達の外人から聞いた。どうも英語はむづかしい。

フ「あなたは月曜日(十一月三日)までこちらにいますか、それともビスタに住みたいですか? ビスタに滞在したいですか?」

この質問は少々意外である。私が三日朝まで手紙で知らせておいたことは事前にアリス宛の手紙で知らせてあり、それをフレッドも読んでいたことをアリスの返事で知っていたからである。

そこで私は答えた。

「私たちは三日の朝までこちらに滞在する予定です」

「そうですか」

と答えて、フレッドはメキシコの話をし始めた。

「現在、メキシコはいろいろな政治的な状況でよくないのです。メキシコ人は——彼らはグリゴと呼んでいますが——アメリカ人に対してあまり友好的ではありません。ビザと呼ばれる旅行者カードで六カ月間住めたものを、その後三カ月間に変更されたため、旅行者としてメキシコへ入つた人はすべて三カ月ごとに国境まで帰らねばならず、これではずいぶん高いものにつきます。私のいた所はメキシコの中の二千マイルも入つた所で、新しい旅行者カードを入手するために国境まで帰らねばならないこと、政治的な圧力のために、居所を売つて米国へ帰る

ことにしました。メキシコにいるのは、かなりの冒険です」

久「あなたの仕事は?」

フ「私の仕事? 私はホテル関係で働いています。今まではずっとホテル関係で働いてきました。ドイツでホテルの仕事を知つたのです。ニューヨーク、ニュージャージー、デンバー、その他の都市でホテル関係の仕事をしました。今はこの南カリフォルニアで働いています」

久「なるほど」

フ「それで今日はウェルズ夫人の家(ファミレスキー財団)で別れたあと、仕事に行かねばなりません。日曜日は休みですから、パロマーへ案内できますし、映画もお見せできます」

久「そりゃいい。あなたの先祖がドイツから来られたのだからか?」

フ「いや、私がドイツから来たのです。私はドイツのベルリンで生まれて、二十一歳までドイツの学校へ行つていました。二十一歳のときドイツを出たのです。私の妻(イングリッド)もドイツから来ました。そしてカナダで結婚しました」

久「ずいぶん流暢に英語を話しますね」

フ「もう長いあいだこちらに住んでいますから」

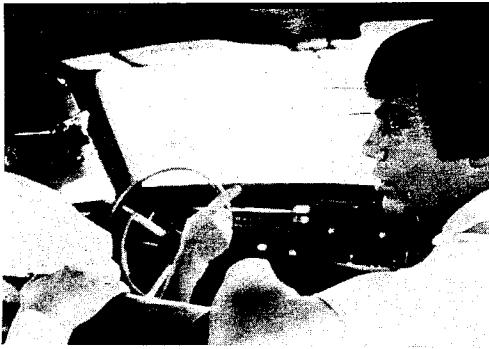
久「私はジム・エンツミンガーという名前を知っていますが——」

フ「そうですか?」

久「どんな人ですか?」

ジム・エンツミンガーというのはGAP本部発行の機関誌「ゴズミック・プレティン」に、しばしば好論文を出してい





●運転するフレッド(左)とスティーヴ

た人である。すると助手席の男が初めて口を開いた。

「彼はウェルズ夫人の友達だったので、もうここにはいません。二人のあいだに大きなトラブルがあって、彼は去って行ったのです」

久「ああ、二人のあいだにトラブルが——。なぜですか？ どんなトラブルですか？」

男「そうですね(と言って明るく笑う)そりゃ長い話になりますよ。いろいろあったんです」

久「そうですか。ジム・エンツミンガーはコンタクトマンだと聞いていましたが——」と私は感違ひして言った。これはスティーヴ・ホワイティングと言うべきだったこととあとで気づいた。かつてスティーヴという少年がアダムスキー・グ

ループにいて、超能力者で、ア氏亡きあとでテレパシーにによって想念を交換したのです。それからまたビーブルに会って尋ねました。『あの想念は正しかったでしょうか？』と。しかし、ただテレパシーだけで宇宙人と通信したというのは心霊的な体験であって、これではだめです」

久「彼はテレパシー能力を持っているんでしょうか？」と、まだ感違ひしている。男「そうですね。こんなふうに言えるでしょうか。かなり以前に彼と知り合ってそれ以来ずっとつき合いましたが、普通の人と全然変わらなことがわかったのです」

久「はは、彼はコンタクトマンではなかったのですか？」

男「そうですね」

久「はは、彼はコンタクトマンではなかったのですか？」

男「そうですね」

久「そうですね」

フレッドが話す。

「ね、エンツミンガーはテレパシーでコンタクトしたと言っていますが、スベイス・ビーブルはそんなふうには(テレパシーだけで)地球人に話しかけることはいないのです」

男「そんなことはしませんね」

フ「スペース・ビーブルは相手に応じて英語、日本語、ドイツ語などで話しかけます。これは地球人がテレパシーというものをよく知らないからです。おわかりでしょう、テレパシーは地球人にとって未知なものなのです。地球人はテレパシーなるものをほとんど知りません。テレパシーで正しい情報を得るといふことになると、それがやれた唯一の人を知っています。それはアダムスキー氏です。しかし彼は個人的に(直接面と向かって)

スベイス・ビーブルに会いました。そのあとでテレパシーによって想念を交換したのです。それからまたビーブルに会って尋ねました。『あの想念は正しかったでしょうか？』と。しかし、ただテレパシーだけで宇宙人と通信したというのは心霊的な体験であって、これではだめです」

久「はは、ア」

フ「ずいぶん多くの人がテレパシーで宇宙人と交信したと称していますが、みなだめです」

男「大抵の人がそうしたと言っています。彼らは宇宙人とテレパシーで交信したと言っていますが、みなだめです」

久「それはわかってはいます」

男「彼らは一部分(の情報)だけをキャッチしているのです。ほんのわずかをキャッチするだけで、あとの情報は間違っています。そしてあらゆる種類の混乱をまき散らしているものであって、だれも真実を知りません」

久「フィジカル・コンタクト(面と向かってのコンタクト)が重要なのですね」

男「そう、そう」

車はかなりのスピードで進行する。家が隣接して立ち並ぶ日本とは違って、小さな民家が丘々に点在するだけで、余分な土地がかなり目立つ。舗装されたハイウェイや所々にある交通標識などは日本のそれと大体にボタンは同じで、異なるのは標識の文字が横文字ということぐらいである。急にフレッドが話題を変えて「今、カリフォルニアは乾燥期です。来月までには雨が降るでしょう。昨夜は雨

が降ったためにあらゆるものが緑色に見えます。あまりいい景色ではありません。パロマー山はいいですよ」

久「この車はきれいですね」とほめるとスティーヴは日本製のトヨタを持ってきているのだとフレッドが説明する。日本製の自動車は米国で相当に人気があるらしい。ただし彼らは「トヨタ」と「ヨ」にアクセントをつけて発音するので、そうではない「トヨタ」だと「ト」を高く言

って私が訂正する。

フ「ウェルズ夫人の所へ行くと、マーサが相当な高齢であることがわかるでしょう」

久「ほう、何歳ですか？」

フ「ウェルズ夫人は七十五歳です」

久「ヘー」

フ「マーサ・ウルリッチは八十六か八十五歳です」

男「八十五歳ですよ。大変な年寄りだ」

久「八十五歳？ 年寄りですね」

フ「だから私たちはあの二人を援助するためにこちらへ来たのです。そんなに年を取っていると援助が必要ですからね」

男はスティーヴだった

このとき私は助手席の眼のギョロツとした青年が一体だれなのか、しきりに気になってきて尋ねた。

「あなたのお名前は？」

男「やア……私の名前はスティーヴ・ホワイティングです」

驚いた！ この神秘的な風ぼうの青年が問題のスティーヴなのだ！

「ああ、ステイヴ・ハワイティング！あなたの名前を知ってますよ！」

ス「そうですか」

ここで私は感違っていたことにやっ

と気づいたのである。

久「あなたはコンタクトマンだそうですね？」

ス「うん(笑)……でも、さっきのテレビシーのようなものは信じません。

私はたびたびスペース・ブラザーズに会いました。しかしそれでもブラザーズに

会っていると思います。それに気づくか

気づかないだけのことです。というのは彼らは地球人のそばへ来て『よう、私は金星から来たんだよ』とか『大気圏外から来たんだよ』とは言わないからです。

ですから、だれもみなブラザーズに会っているのですが、気づいたり気づかなか

なかったりするんじゃないでしょうか」

久「あなたのテレビシーほどの程度のも

のですか？」

ス「ああ……そうですね、私たちはそれを応用しています……とてもうまくゆく

のです」

久「フレッドと(二人の間でですか)」

ス「そう、他人ともね」

フ「家族ともやっていますよ」

ス「うまくやれるように、なるべく応用しているのです」

フ「さあ、ビスタへ入りましたよ。ここは小さな町ですが、たいへんいい所です。気候もたいそうよくて、寒すぎることもなく暑すぎることもありませ



●GAP本部付近

に小さな町へ入ったという感じがする。「アダムスキーはどんな人でしたか？」と、本部へ着くまでに彼の感想を聞いてみることにした。

フ「おお……彼は私の人生で会った最高の人でした。あらゆることを知っていましたね。政治、経済、宗教、野球……何でも知っていました」

Anything he knew anything.」

フレッドの声が高くなって熱がこもってくる。

「彼は普通人のように見えましたが、た

いそう高貴な人でした。彼の唯一の動機は人々を助けることで、そういうタイプの人でした。……これがロマ・ドライブ

です」と、走っている道路を指さす。ロマ・ドライブというのは本部のアドレス



●玄関前に到着したフレッド、久保田、ステーブ

の地名なので、いよいよ近づいたな、と私はいささか緊張した。

フ「彼はここに三年だけ任んで死んだのです。もちろん、あちこちへ講演に出かけましたし、ワシントンやボストンにも講演に行きました。彼があちらで死んだ

ときに私はそこにいました。ここにはあまり長くいませんでしたね。ここはいい所です」

久「映画フィルムは今どこにあるのですか？」

これはアダムスキーが撮影したUFO

フィルムのことである。

フ「私を持っています。日曜日(十一月

二日)にお目にかけます。アダムスキー氏のあらゆるフィルムを持っています」

車はあちこちと道路を曲がりながら、

ゆるやかな登り坂になった道を行って、角を曲がった所で止まった。降りて見ると、眼の前に平屋のこぎれいな青い家があり、シエロの木があちこちに立っている。まるでアメリカ映画に出てくる光景だ。家のドアまではコンクリートの段があるの

で、家の敷地は道路よりも少し高くなっている。車の中からカメラバッグや土産物の入った手提げ袋などを取り出してモソモソしていると、その間にハ

ーさんがしきりと写真を撮っている。フレッドが先頭に立ち、続いてステイヴ

私、ハーさんの順で、コンクリートの段を数段登って、ドアの前まで行く。

GAP本部へ着く

ドアのそばに「ジョージ・アダムスキー財団」とか何とか大きな看板でも掲げているのかと思っていたが、家屋番号を示す数字以外に、それらしいものは

何もないので、意外な感じがした。要するに、あちこちに見られる民家と何ら変わりは

ない。もちろん、家のスタイルは日本のそれとは違う。

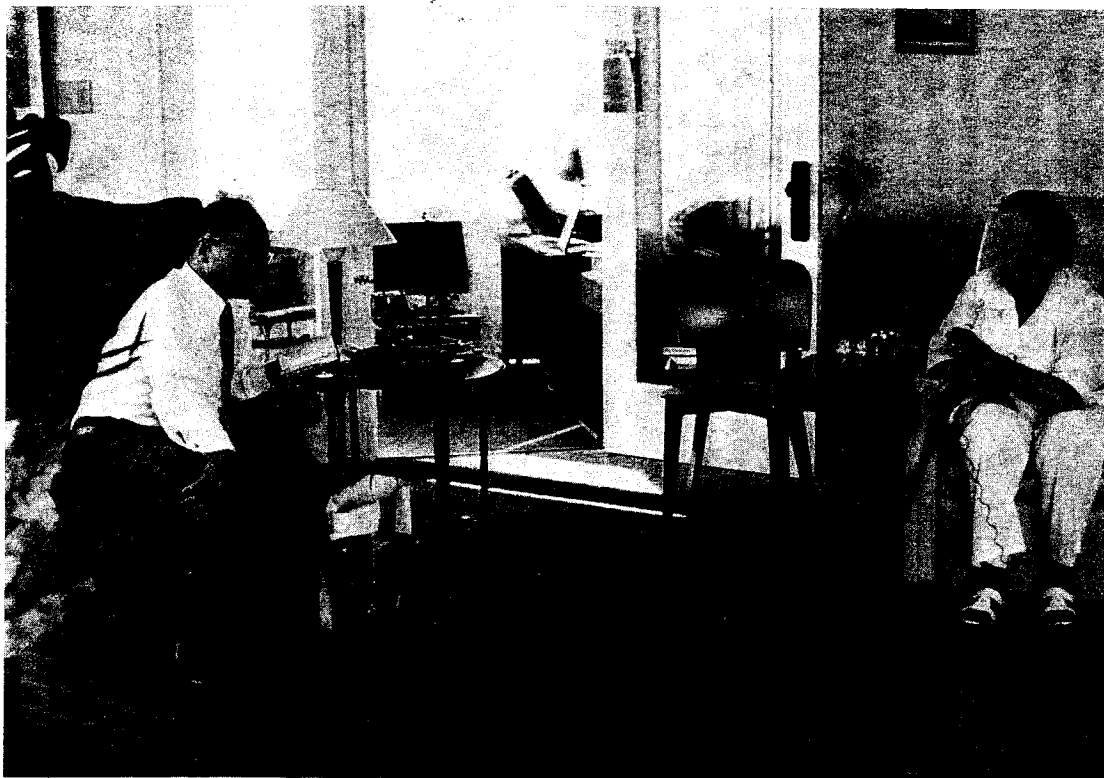
フレッドがベルを押すと、まもなくドアが開いて、上品な顔つきの老婦人が

にこやかに顔を出す。これだ！アリス・ウェルズだ！かなり年を取っている

のだなと思いつながら中へ入り、奥の広間へ案内されて、そこであらためてアリス

とマーサに挨拶する。そして、すすめられるままに一つのソファに腰をおろした。アリスは私から数メートル離れた入口に

近い位置にあるソファに座り、マー



●久保田（左）とアリス・ウェルズ

サはずっと奥の右手のソファに座って、フレッドとステイヴは奥の左手の長いソファに腰をおろした。したがって互いにかかなりの距離があるが、室内がたいそう静かなので、みんなの声はよく聞きとれる。アリスは真白の服に幅の広いパンタロンをはいて、杖を手にしており、マリーサは青い派手な服を着ている。日本では二十歳前後の娘さんに似合うような柄の服だが、八十五歳の老婆とはいえず、白人女性だから少しも不自然ではない。

奥の方からフレッドがまず、しきりと話しかけてくる。達者に英語をしゃべるがインドかイングランドにいたことがあるのかと言うので、いや、これが最初の海外旅行だと言うと、奇妙な顔をしている。しばらく雑談が続いてから私はそろそろ土産物を出してアリス、マリーサ、フレッドにくばった。ステイヴに持って来なかったのを残念に思ったが、どうにも仕方がない。

この広間はいわゆるリビングルームの形式になっているが、広さはかなりあって、三十畳近くはあるだろう。入口から見て右手の壁の中央に暖炉が切っただけあり、その上方にアダムスキーのカラー写真が飾ってあるのが眼についた。これはコダック社を訪れたときにウィリアム・シャーウッドが撮った写真で、私も持っているからすぐわかった。この広間へ入るまでに通り抜けた部屋、つまりドアから広間の入口まで続く小さな部屋が事務室であり、ここでアダムスキーが三年間執務したのである。暖炉の前には美しい

花が大きく生けてあり、左手の壁には円盤と母船を描いた十号ぐらいの絵がかけられている。その他、壁のあちこちに小さな写真や絵などが飾ってある。

アリスに土産物を渡すと、彼女は喜んだ（この土産物というのは東京の三越デパートで買った婦人の和装用ハンドバッグで、東洋風の模様の入ったものだが、彼女はすぐに開こうとはしなかった）。続いて私は寄付金として百ドル入った封筒を渡した。この金はハーさんが個人的に出したものを日本GAPの名義で献金したのである。彼女はいたく感謝した。「どうも有難う。あなたからの献金もたしかにいただきました」

これは渡米前に私が個人で百ドル送っておいた寄付を意味する。生活水準の高い米国で百ドルというのは些少な額だろうが、三万円という金は私にとっては大金なので、気持は果たしたと思った。

「アダムスキーがこちらにいた頃、若い日本人が来たことがあります」

久「それはだれですか？」

ア「思い出せません。名前はファイルの中にあります」

アリスの声は年齢不相应に若々しく、やさしく、はなやかな楽しそうな声で、あたりの雰囲気明るくなってくる。ところがマリーサは八十五歳とは思えない大きな声を出す。まるで怒鳴るような調子だ。何という元気のよければあさんだろうと、あらためて驚いた。

ア「日本からUFOの雑誌が来ています。これはあなたに関係のあるものですか？ それとも全然関係はありません」

か？」

出された雑誌を見ると、何のことはない、私が出している「UFOと宇宙」の第十三号だ。これはアリスに送ってなかったのだ、日本のだれかが送ったのだから思っていると、送り主の手紙の封筒を見せるので、発信人を見て、ハハハと思った。この人はかつて日本GAPのメ



●マイクを持つアリス

ンバーであったが、デマにまどわされて私を信じなくなった人物である。簡単にそのことをアリスに説明すると、笑っている。

久「これは私が東京で出している雑誌ですよ」

ア「あなたが出しているの？」

久「そうです」

ア「それもあなたが出しているのね」

久「私は小さな出版社を経営していて、『UFOと宇宙』という隔月刊誌を出しているんです」

大体に私はユニバース出版社のことは米国GAPに詳細に知らせてはいなかった。これはあくまでも企業であり、GAP活動とは別だと考えて、区別していたのである。もちろんGAPニューズレターは発行の都度送ってあるし、月例研究

会の記念写真なども送ってある。その一枚をアリスは手許に持っていた。

日本GAPにもいろいろなトラブルがあつて、去って行く人も多い、という意味のことを話すと、アリスも同感の意をあらわして

「こちらでもいろいろありますよ。多くの人がみな自分の道を行くのです」と言う。

久「日本でもアダムスキーに関する多くのデマがあつて、多くのトラブルが発生するんです」

ア「ハンス・ペテルセンから来たものをお見せしましょう。彼のGAP機関誌を入手していますか？」

ハンス・ペテルセンはデンマークのGAPリーダーとして多年活躍している人で、その機関誌「UFOコンタクト」は私の所にも送られてくる。

久「ええ、送ってきますよ」

テ「これが先日送って来た記事です」

### ロジャーズを問題にせず

見ると、先般、日本でも各新聞に載ったイギリスUFO協会のケン・ロジャーズなる人物の、ア氏の円盤写真はピン冷却器を撮影したという小記事である。

久「ああ、ケン・ロジャーズ……そう、この記事は日本の新聞にも出て、トラブルのタネになりました」

ア「しかし一般人がどんなに盲目であるかがわかるでしょう。というのは、だれかがあの冷却器を作ったのです。アダムスキーの写真をまねて作ったんですよ。」

この十年ないし十五年間、アダムスキーの写真と同じタイプの円盤が見られています。ベル型で下部に三個の球を持つ円盤がニュージールランド、オーストラリア、ヨーロッパ、その他の地域で目撃されています。だから円盤はたしかに実在するのです。……だけれど一人の男が模型を作ると、今はこうした写真はすべてインチキだということにされています。一般大衆の心がいかに狭いかがわかるでしょう。彼らは考えようとしません。」

久「ときどき日本でもアダムスキー型円盤が出現します。この写真はトヨタ自工の社員の方が撮影したものです」と言つて私は持参したポジカラーを取り出して見せた。これは「UFOと宇宙」第14号の表紙と第15号の口絵に掲載されたものである。アリスはそれをかざして見ながら

「そうね、これはベル型ですね」と言う。

フレッドとステイヴも寄つて来て、その写真を見ている。その間、アリスがベルギーGAPリーダーだったメイ・モレーのことに言及して、彼女の機関誌が送られて来るかと尋ねる。「来る」と答えると、彼女は一九六三年に夫と一緒に訪ねて来たが、その後、夫が死んだために姓が変わつたというようなことを話す。フレッドはまだ豊田市のアダムスキー型写真を見ていて、私に二、三の質問をする。

「ケン・ロジャーズによれば、この豊田市の写真も冷却器を写したということになりますね」と私が言つて笑うと、みんなも笑う。ロジャーズのデマなど全く問題にしないという様子だ。

フ「ご存知でしょうが一九五二年にダービシャー少年が英国で写真を撮る前に、だれも模型などを作らなかつたんですよ。私はアダムスキー型円盤を何度も見えています。あるときは白昼と夜に非常に接近したのを見ました。円盤が実在することを私は知っているんです。他人からそのことを聞く必要はありません」

久「ここで見たのですか？」

フ「ワシントン市とデンバーです。ピスタでは映画も撮りましたし、昨年は自宅の上空へ来たのを映画に撮りました。日曜日にお見せします。この豊田市の円盤はスライドにして講演で使用しよう」

ア「あなたの会社はユニバース出版社というの？」

そうだと答えると、フレッドが「UFOと宇宙」の発行部数はどれぐらいかと聞く。その数を答えると、みな驚いている。どうやら世界でこれほどの発行部数を持つUFO専門誌は他にないらしい。あと二日間のスケデュールなどを話し合ったあと、ここらでいよいよ重要な質問に移ろうと思つて、私はあらためてアリスの方に向き直り、

「アダムスキーに関していろいろ質問があるのですが、いいですか？」と切り出すと、どういわけかフレッドが急に立ち上がつて

「私は行かねばなりません。お土産を有難う。明日会いましょう。どんな質問でもウェルズ夫人が喜んで答えてくれるで

なも笑う。ロジャーズのデマなど全く問題にしないという様子だ。

フ「ご存知でしょうが一九五二年にダービシャー少年が英国で写真を撮る前に、だれも模型などを作らなかつたんですよ。私はアダムスキー型円盤を何度も見えています。あるときは白昼と夜に非常に接近したのを見ました。円盤が実在することを私は知っているんです。他人からそのことを聞く必要はありません」

久「ここで見たのですか？」

フ「ワシントン市とデンバーです。ピスタでは映画も撮りましたし、昨年は自宅の上空へ来たのを映画に撮りました。日曜日にお見せします。この豊田市の円盤はスライドにして講演で使用しよう」

ア「あなたの会社はユニバース出版社というの？」

そうだと答えると、フレッドが「UFOと宇宙」の発行部数はどれぐらいかと聞く。その数を答えると、みな驚いている。どうやら世界でこれほどの発行部数を持つUFO専門誌は他にないらしい。あと二日間のスケデュールなどを話し合ったあと、ここらでいよいよ重要な質問に移ろうと思つて、私はあらためてアリスの方に向き直り、

「アダムスキーに関していろいろ質問があるのですが、いいですか？」と切り出すと、どういわけかフレッドが急に立ち上がつて

「私は行かねばなりません。お土産を有難う。明日会いましょう。どんな質問でもウェルズ夫人が喜んで答えてくれるで

なも笑う。ロジャーズのデマなど全く問題にしないという様子だ。

フ「ご存知でしょうが一九五二年にダービシャー少年が英国で写真を撮る前に、だれも模型などを作らなかつたんですよ。私はアダムスキー型円盤を何度も見えています。あるときは白昼と夜に非常に接近したのを見ました。円盤が実在することを私は知っているんです。他人からそのことを聞く必要はありません」

久「ここで見たのですか？」

「しょう」と言って、ステイヴと一緒にそそくさと出て行った。私が話しやすいようにと気をきかせたのだらう。そこで気を落ち着かせてやおらバッグから手帳を取り出し、途中の機内で思いつくままに書きとめた質問表の箇所を開いた。

### アリスとの対話

久「まず第一の質問ですが、アダムスキーは東洋の哲学を研究するためにチベットにいたことがあるようですが、これは本当ですか？ 子供のときにいたのですか？」

これは別掲記事「進歩した思索家のために」と題するア氏の論文中でそのことが述べてあって、これを読んで意外に思ったからである。

ア「本当です。彼の父はカトリック教徒で、母親はエジプト人でした。母親は彼をカトリック教会で教育させたかったのですが、彼はウルトラ・ボーイでしたから、ある年齢になるまで待って、それから東洋の哲学を研究させようとしてしまった。そこで準備がなされて、彼は約四年間ラサ(チベットの首都)にいました。そこへ行ったのは十四歳ぐらいだったと思います。もっと年少だったかもしれない」

今年(一九七五年)七月に広島県三原市で円盤から出て来た宇宙人とコンタクトしたという姫路市の大僧正・北野恵宝師も、若い頃、チベットの秘境で四年間修業して超能力を開発されたという情報を日本出発前に塩谷博士より伝えられて

いたので、こりやチベットへ行かなくちゃだめかなと思いがら次の質問に移る。

久「アダムスキーの家族のだれかが米国にいますか？」

ア「ニューヨーク州に姪が一人いるはずですよ。しかしどこに居るのかわかりません。手紙を出したことがあります。「居所不明」で返送されてきました。ですから家族とは全然連絡していません。……その姪はニューヨーク州のラカワナにいたはずですよ」

久「アダムスキーは真実のコンタクトマンではなく、ゴーストライターが書いたのだという説がありますが、これについては？」

### アダムスキーは真実のコンタクトマンだった

ア「彼がコンタクトしなかったというのですか？ とんでもない、彼はコンタクトしたんですよ(と、ここでアリスは、"paraplan"という言葉に力を入れた)。だって私は彼のコンタクトの現場のいくつかに居合わせたんだから、彼はたしかにコンタクトしていますよ。彼が最初に砂漠でオーソンと会ったときはオーソンにいました。もちろんそのときはオーソンという名をつけてはいなかったんですよ、一九五二年のあの記念すべき十一月二十日に、私はそこにいたんですよ。だから彼のコンタクト(複数)は真実です、私も多くのスペースシップを見ています」

久「あなたは砂漠でオーソンを見たのですね？」

ア「そう、遠くから双眼鏡で見ました。砂の中に残された足跡も見ただよ。砂は小さな花崗岩でした。あの本の中に載っている足跡ですよ」

アリスは淡々と、しかも楽しそうに記憶をたどりながら話す。でっかあげを如何にして巧みに保とうかという様子はみじんもなく、むしろなつかしい過去の追憶にふけっているかのようだ。しかも言葉を選択しながらポツリポツリと話すのではなく、早口で(これが典型的な西部米語なのだらう)無造作に、ごくありふれた出来事を話すように、明るく声で話し続ける。ときどき正面を見たり、私を見たりする。



●対話を聞いているマーサ(左)

マーサは奥のソファに座って身動きもしない。質問を始める前にアリスがマーサに向かって「もし私が間違ったことを言ったら訂正してね」と呼びかけたところを見ると、無言のまま会話を耳を傾けているらしい。そして、ときたま怒鳴るような調子で合の手を入れたりする。室内は静寂で、戸外の物音はほとんど聞こえない。

久「あなたは六人の目撃者の一人なのでしょう？ そして双眼鏡で見ながらスケッチしたのですか？」

ア「そう、スケッチしました。それがあの本に載ったのよ」

久「そのオリジナルの絵を持っていますか？」

ア「ええ、持っています」

久「ほう、見たいもんですな」

ア「あとで見せましょう。今はしまっているわ。事務室にあるの。そこにはあの油絵もありますわ(オーソンの肖像画のことらしい)。あれはレイ・ベスが描いたものです。ドアーのうしろにかけてあります。レイ・ベスがアダムスキーの説明と私のスケッチをもとにして等身大の油絵を描いたもので、アダムスキーによると、あの絵は八十五パーセント正しいということですよ。実際は髪がもう少しブロンド(金髪)で、もう少し長かったと思うけど、ほかの点ではとてもよく描けているということですよ」

久「その双眼鏡を今も持っていますか？」

ア「持ってますわ。彼の双眼鏡を……」

久「あのとき円盤を見ましたか？」

ア「見てはいません。丘のうしろに入っ



●オーソン肖像画の横に立つ筆者

たからです。母船は見ました」

このことは「実見記」にも書いてあるので、我々はよく知っている。続いて、ア氏が撮った未公開の写真類について尋ねてみたが、アリスはなぜかはっきりと答えたがらない。まだ沢山の写真が隠してあるんだな、と思ったが、しつこく聞くのはやめることにして、とにかくオーソンのオリジナル肖像画をしきりと見たくなった。一体どこにかけてあるのだろうと思ひ、また尋ねると、マーサがアリスにむかって口を開いた。

「あんたが話しているあいだにもクボタは見たいんだらう。今、見たいの？」と私に聞く。そうだ、と答えると、マーサが立ち上がり、ゆっくりと歩きながら私を事務室の方へ案内する。ついて行っ

てみると、あった！ 入口のドアのかけかかれて見えなかったのだ。つまり玄関の（といっても、あちらの家は日本の家屋の土間の玄関みたいなものはない。ドアをあければいきなり部屋へ入る）ドアのすぐ横の壁にかけてあるので、ドアが内部へむかって開くと、そのかげになって絵は見えなくなるのである。

### オーソンの肖像画を見る

何というすばらしい絵だろう！ 等身大に描かれたオーソンが眼前に片手を上げて立っている。しかし顔やあちこちの部分が無さずんでいるのはどうしたことなのか！

ア「七一年にこの家が火事になったんで

すよ。広間の電線から火が出て、家具類はみなだめになったけど、オーソンの絵はそんなにきずつかなかったわ。少し煙をかぶっただけ……」

日本語でいう「ボヤ」のことらしい。このことは当時、火事の直後に連絡があったので、私は驚かなかった。資料類は全部持ち出したという。しかし惜しいことをしたものだ。美しいオーソンの顔は少々す黒くなっている。

ふたたび広間へ引き返して腰をおろし質問を続ける。ア氏の写真類のこと、その他の資料類のことなど……。しかしアリスはこちらが「何々を持っていくか」と、その物を明確に指摘しない限り、自分で言及しようとはしない。調子に乗って次々と資料を引っ張り出すという態度ではない。体が不自由なためか、別に考えがあつてのことか、よくわからない。

久「アダムスキーはテレパシー、透視などの超能力を持っていたということですが、それは本当ですか？」

ア「ええ、本当です。私はアダムスキーの伝記を書きました。その原稿は今出版社へ行っています。それには今まで世界中から寄せられた質問に対する回答が書いてありますから、出版されればよいがと思っています。「なぜアダムスキーはあのような仕事をやれたのか？」というような質問もあります。……彼はその仕事のために生まれたのです。偶然のことではありません。彼には背景がありました。マーサと私は四十年間彼を知っていますし、生涯中、親しく仕えてきました。死後十年間は財団を維持してきました

たので彼が持っていた能力と知識、そして書物に書かれた知識と哲学が本物であり、宇宙的な知識であることも知っています。私たちが生命を理解し、進歩し、コスミック・プランの一部分になるうと思えば、やがては理解しなければならぬ知識です」

久「なるほど。同乗記によればアダムスキーはロサンジェルスのホテルでファーコンとラミューという二人のブラザーズに会ったということですが、そのホテルの名は何といたのですか？」

ア「あれはクラーク・ホテルというの。ア・ストリートにあつたクラーク・ホテルです。一流ではないし、かなり古くからのホテルですから、もう古びてしまつたでしょう。今はないかもしれませぬ。四番街と五番街の間のヒル・ストリートですよ」

続いて私は同乗記に出てくるブラザーズの名前について、それぞれ何らかの意味があるのかと尋ねてみた。しかしアリスは知らないと言う。それらの名はたぶんブラザーズのアドバイスによって与えられたのだろうと言う。（しかしあとでマサチューセッツ州ノースポロのアリス・ポマロイはオーソンとラミューの意味を教えてくださいました。とするとアリス・ウェルズが知らぬはずはないので、何かの理由で話をボカしたのだろうか）

私はしつこく尋ねてみた。

「何かの意味があると思いますかねエ」

ア「私もそう思うわ」

久「だが私にはわからないんですよ」

ア「意味はあると思うわ。でもそれは言



えません。聞いたことはあるけど、今は思い出せないわ」

明らかに話をボカしている。言えないということ自体に何か深い意味があるのだろうか。しゃべってよい事といけない事ははっきり意識しながら話しているらしい。

そこでアリスが出している機関誌「ミッド・プレティン」について聞いてみると、さほど発行部数は多くないらしいが、一年に四回は確実に出されていて、私の所にも毎回送ってくるので、内容はわかっている。現在も世界中からアリスの本を読んだ人がペロマー、スターロック、バレーセクター（これらはかつてア氏が転々と変えた居所である）、発行所のワナー社などへ手紙を出すので、それがこのピスタへ回送されてくるという。そして返事を出すときには機関誌を添えて送るのだという。その費用だけでも相当なものだろう。

ここで話題を変えた。

「個人的な質問をしていいですか？」

ア「どうぞ」

久「あなたは何歳ですか？」

ア「七十五歳。今年の七月で七十五になりました。一九〇〇年生まれです」

年齢を聞くのは不作法だということはよく承知しているが、これは資料蒐集のためのインタビューだから、遠慮していいは研究者の資格はない、と理屈をつけて尋ねたのだが、アリスはハキハキと答えてくれた。

久「あなたのご主人は？」

ア「ずっと昔、離婚しました。相互の協

議のもとに……」

久「息子さんか娘さんがありますか？」

ア「子供はいません」

久「どこの学校を出ましたか？」

ア「ハリウッド高校を出てから、南カリフォルニア大学の研究科へ行きまし（短期間の専科のようなものらしい）」

久「じゃ、卒業はしなかったのですか？」

ア「そう、大学卒業生ではありません」

くだらぬ質問に対してアリスは少しもいやな顔をせずに、むしろ協力するような態度で、マイクを片手に持ったまま流れるような調子で話し続ける。

ブラザースはしばしば立ち寄った

久「アダムスキーはカメラを持っていたはずですが、それはどこにありますか？」

ア「彼が持っていた十六ミリカメラはありません。彼は最初にヨーロッパ旅行に出かけたときに十六ミリカメラを持って行きましたが、持ち歩くのに重すぎたため、それを売って八ミリカメラを買いました。それはここにあります」

久「あなたは他の惑星から来た人々とコインタクトしたことがありますか？」

ア「アダムスキーが死んでからはコインタクトしていません。アダムスキーがここにいた当時、多くのブラザースがここへ来たものでした。しかし彼らがここへ来たときも私は会ってはいません。ロサンゼルスとサンディエゴで働いていた（ブラザースの）グループがあったのです。それでこの付近を通過するときには、ここへ立ち寄ってアダムスキーと話



●16ミリ撮影機を持つ故アダムスキー

したり物事の運営法などでアドバイザーしたりしたものでした。しかしブラザースはいつも私をぐっすりと眠らせてしまうので、彼らがここにいるあいだは眼が覚めないのです。翌朝になって私が「あなたの友達（ブラザース）が昨夜ここへ来たんでしょ？」と尋ねると、彼は「どうして知っているんだ？」と言うものですから「今朝起きたときにただ感じただけですよ」と答えるんです。

久「この付近には今でもスペース・ブラザースがいると思いませんか？ カリフォルニアに——」

ア「いると思います。どこにいるのか知りませんが、彼らは働き続けていると思います。彼らはグループ別になって働いていることや、製造会社などへ入って、

それとなくアイデアを与えていることを私は知っています」

久「シャーロット・プロジェクトはどこにいますか？」

シャーロット・プロジェクトというのは同乗記を達意な流麗な文章にまとめたげた文才のある婦人である。

ア「彼女は亡くなりました。もう生きてはいません」

久「いつ死んだのですか？」

ア「数年前だと思えます。私は死んだことを知らなかったのだけど、彼女の友達（婦人）がやって来て、あの人は死んだわ、と言うんです。私たちがカールズバッドにいた頃ですが、彼女（シャーロット・プロジェクト）とルーシー・マクギニス（多年アダムスキーの助手をつと

めて、後に去って行った婦人)が、ジョージを講演にリバーサイドへ連れて行ったことがあり、その頃彼女はラホヤに隠退して、それ以来彼女とは連絡がとれたので、話を聞くまで死んだことを知らなかったんです」

久「こちらには別なアダムスキー支持グループがあるそうですね。中年の女性がリーダーになつて——」

ア「さあ、多くのグループがありますので——」

久「以前、あなたと一緒にいたあの人ですよ」と、私は名前を出してみた。

ア「ああ、それは完全に離れています。彼女は自分の道を行つてしまい、自分こそアダムスキーの正統後継者だと称しています、あれはウソです」

この件に関してはあとでステイヴ、フレッド、アリス・ポマロイからも詳細に聞いたが、アダムスキーはその女性を後継者にしてやると言ったことはなく、むしろクレイジーだ(気が狂っている)と言つてよけるようにしていたという。

久「十五、六年前にアダムスキーから離れて行った別な婦人がいましたね。砂漠の六人の目撃者の一人で——」

ア「ルーシー・マクギニスのことですか？」

久「そうです。彼女はここにいますか？」

ルーシーはかつてア氏の助手として活躍していたが、サイレンス・グループのワナにひっかかって(ア氏は山師なのだと言き込まれて)信じなくなり、去って

行った。この件は当時世界GAP間でかなりの問題となり、私も真相を知ろうとして分離後のルーシーと何度も文通したことがある。しかしルーシーは私宛の私信で、砂漠でたしかに金星人を見たことや、ア氏が偉大な人物であることを述べており、分離した理由としては何か複雑な事情があるようでもあり、真相は今もって不明である。

ア「彼女はエスカンデイドに住んでいると思いますが、やはり連絡は絶えたままです。私たちがパロマー・ガードンズやパロマー・テラセズの財産を売って海岸地帯へ移動したとき、彼女は一緒に来ませんでした。自分の道を行つたんです。これはアダムスキーにとつて大きな失望のタネになりました。彼女は十四年間も秘書として活動したんですからね。でも自分の道を選んだのだから仕方がないわね」

久「なぜ別れたんです？」と私はいささかしつこくなる。

ア「そうね、いわば自分の道を選んだのです。サイレンス・グループの影響があったと思います。彼らは(サイレンス・グループは)アダムスキーの生命をねらつたり、真実を葬り去ろうとしてさまざまな活動を行つてきました。こんなことをはつきりと言いたくはありませんが、その可能性はあります」

久「ルーシーは何をしていますか？」

ア「彼女は薬品を売っているようです。共通の友人がそのことを知っているらしくて、なにか水泳プールに入れる浄化剤みたいなものを売っているようですが、

これはマタ聞きますから——」

久「アダムスキーの名はこのあたりでよく知られていますか？」

ア「ええ」

久「この町のあらゆる人が彼のことを知っていますか？」

ア「あらゆる人というわけではないけど UFO問題に関心のある人はよく知っています」

続いて私はア氏の原書の発行状況について尋ねてみた。するとアリスは最初はイギリスのワーナー・ローリー社がとりあげた経緯についてくわしく話してくれました。それによると、現在出ている(絶版になったとも伝えられているが)イギリスのネビルスピアマン社の「実見記」に出ているデスモンド・レスリーの「アダムスキーに関するコメントラリー(本誌に連載中)」の書き方について、アリスは面白く思っていないらしい。

### 円盤や母船が出現する

久「円盤や母船がこの地域に出現しますか？」

ア「ええ、よく目撃されるんですよ。先日の夜もフレッドがここに来ていて、帰りがけたとき、「アリス、シップ(UFO)が見えるよ」と呼んでいます。それで不自由な体をひきずって踏み段を降りてみると空中にすぐ輝く物体が見えるんです。円盤が来ると私は実際に目撃するときよりもフィーリングが起こりますから、大抵の場合は外へ出て見ませ

ん。今までにずいぶん目撃していますので、外へ出て見たところでたいしてスリルを感じることはないのよ。でも円盤がやって来るときはフィーリングがわき起こります。それがわかるんです。シップが来たな、という意識的な知覚です」

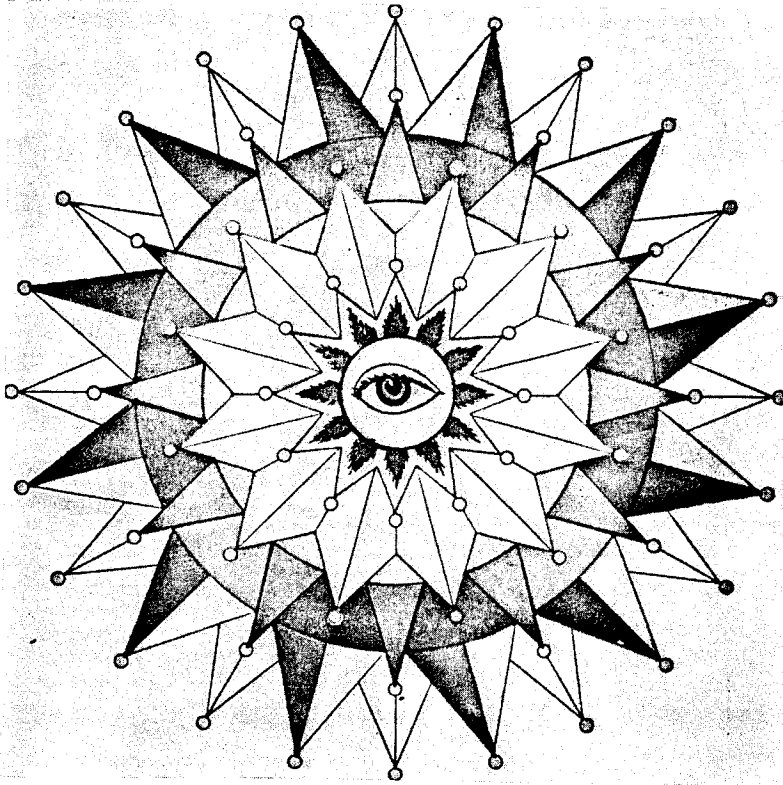
久「数年前にこの家で火事があったそうですね」

ア「ええ、四年前です。屋内配線から火が出て、ソファに燃え移りました。新たに張り替えたばかりのダヴンポートのソファで、中に沢山のフォームラバーが詰めてありました。それがよく燃えてすごい煙が出たんです。マーサは早くから寝ており、私も十時頃に寝ました。十二時頃に眼が覚めると家中が煙です。すぐにあかりをつけたけど、煙で何も見えないの。裏から出て助けて呼ぼうと思つたり、電話をかけようと思つたけど、それができないの。炎のために電話のある位置まで行けないんですよ。すると裏の家の人たちが来て、消防署へ電話をかけてくれた。女が一人、屋内で気を失っていたから大至急に来てくれと言つてちょうだい」と言つたんです。マーサは自室で床の上に倒れていました。みんなが入り込んで私たちを救出してくれました。この家には保険がかけてあったんですが、保険金ももらえないまでに五カ月もかかったんですよ。保険会社のなんとスロウなこと、だからこの家を修理して帰つて来るまでに五カ月ちょっとかかったんです」

まあ、ボヤでよかった。

## 金星のシンボル・マーク

オーソンの左手の指の所に貼りつけてある奇妙なシンボル・マークの意味が知りたくなった。これは肖像写真にも写っているので、日本GAPの会員諸氏からよく質問される問題のマークである。そのことを話すトアリスは印刷したカラー



のシンボル・マークを一枚持ち出して来た。

久「このシンボルは何を意味するのですか？」

ア「これは二十四のポイント（とがった部分）を持つ星です。これが人間の二十四の面をあらわします。中心部から何層にも星が描いてあるのは、人間が次第に向上して発達してゆく可能性をあらわし

ているのです。中心部に描いてある眼は

「すべてを見る眼」で、魂でもあり、

「父性原理」です。中心寄りの暗い星は

まだ未発達な状態をあらわします。そして

次第に知覚力と理解力が発達するにつれて、

外側の星が何層にも広がってゆきます。私たちがラグナビーチにいたとき、

「インスピレーションの祭典」を開いたことがあります。そのときのプログラムにこのシンボルを用いました。欲

しければコピーを一枚差し上げましょう」

「しめた！」と思って、私は一枚もらって

カバンにしまい込んだ。

久「このシンボルは金星で用いられているのですか？」

ア「そうです。金星のシンボルでもあるのです。多少とも金星人の生き方をあらわしているようですね」

「ということは、ラグナビーチにいたのは一九五二年以前のことだから、その頃

はこのシンボルを入手していたというのは

すでに金星人とコンタクトしながらも

それを秘めていたか、それとも相手が金星人であるとは知らないでこのシンボル

を与えられたかのいずれかということになる。私の調査では後者が有力である。

久「この人（オーソン）を砂漠で見たのですか？」

ア「双眼鏡でね。でもこの人が地面に残した足跡を見るのもすでにしたわ」

久「どんな種類の双眼鏡ですか？」

ア「普通のタイプの長い双眼鏡です」

久「今でもそれを持っていますか？」

ア「ええ、持っていますわ。アダムスキー

ーが海軍の人からもらった立派な品物です」

## オーソンはバロマーへ来た！

ここでオーソンの金髪について聞いてみると――

ア「アダムスキーは、あの人の（オーソンの）髪は実際にはもう少し金色で、もう少し長かったと言っていました」と言

ってからアリスは重要なことを話し始めた。「私たちがバロマー・テラセズに

いた当時、あの人（オーソン）がそこへ来たんです。ある日曜日の午後、アダムス

キーが人々に話していたときのことです

が、あの人は帽子をかぶって長髪をその下に隠していたんだそうです。今でこそ

若い人たちは長髪をしています。今でこそ

頭は長髪は流行しなかったのですが、あの頃は長髪は流行しなかったのです。

また、あるときルーシーと私が出かけていたんですが、テントの中にかなり重い

家具が一個あって、それをアダムスキーは自分の部屋へ持ち込もうと考えてい

ました。たしかタンスだったと思いま

す。それで、運搬用の機械を持っている人を雇わなくちゃだめよ、と言っていた

んですが、二人がエスカンディッドから帰

ってみると、そのタンスがちゃんと部屋

の中に置いてあるんです。そこで『どうして運んだの？』と尋ねると、アダムス

キーは『オーソンが来て、これを持ち上げてくれたよ』と言っていました」とア

リスは笑いながら話す。

久「あなたは双眼鏡をのぞきながら、現

場でスケッチしたのですか？」

ア「いいえ、砂漠から帰ったあとで著書に掲載するのに必要だというので描いたんです。砂漠では筆記用具などを持たなかったもので、あとでペンとインクを使って描きました」

久「絵を描くことがうまいですね」

ア「さあ、どうだか……。あちらに私の木彫りの作品が置いてありますが、あれは記念に持っている物です。ずっと以前に私が作ったものです。人がよく私の過去世のことを尋ねるので、そんなときは『ほら、ここにその証拠がありますよ』と言うんです。全然、彫り方を教わったわけでもないのに——」

どうやらアリスは過去世ですぐれた芸術家だったということを示唆しているらしい。生まれ変わりやカルマの問題はこのグループの人々からたつぷり聞かされたことであって、あらためてこの問題を深く考えさせられた。

久「アダムスキーは金星に生まれ変わったのですか？」

ア「さあ、彼がどの惑星から来たのか知りませんが、教えるために志願して来たのです。文明が偉大な教師を必要とするときはいつもその教師が出現します。ブッダ、モハメット、イエス、その他の偉大な人が来ていますね。ジョージ・アダムスキーも全く何の飾りも宗教臭さもなく簡単に教えを伝えてくれました。だから人々にアピールするのです」

久「彼は今、金星に住んでいるのですか？」

ア「たしかではありませんが、しばらく

金星にいました。それから土星へ行つて

そこにいて、この太陽系以外の新しい惑星へ行つた可能性があります。しかし宇宙船で旅行できるのですから、どこへでも行けるでしょう。でも本当の意味でここを離れたわけではありません。人々がこの家へ来れば彼の大きな印象を受けますし、彼を知っていた人や教えに通じている人は、ここで彼の影響を感じます。私もそうなのです」

久「どうも私は彼が金星に住んでいて、私たちを見ているように思うんですが——」

ア「そう、彼らは宇宙船で旅をするんだから私たちを見ているでしょう(笑う)。

でも、どの惑星にしようか問題ではありません。彼はブラザーズと一緒に宇宙船で旅をするのですからね。彼らはここへ飛んで来て、地上へビームを放射して行われている物事を見ているでしょう。そういうことのやれる装置を持っているのですから——。そして人間が心の中で考えていることもわかるでしょう。……うしろへ行つてアダムスキーの部屋や、あちこちを見ませんか」

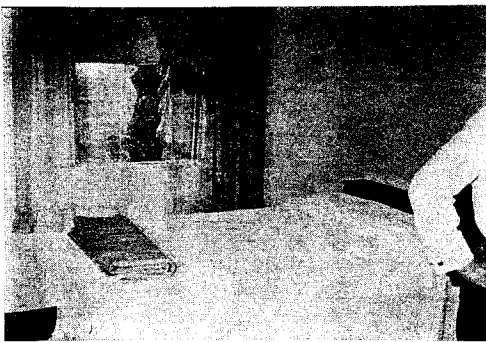
### ア氏の寢室を見る

私は大喜びして同意した。アリスが立ち上がって案内する。広間につながる食堂の横に、更に入口があつて、そこから奥へ通じる狭い通路がある。その通路の片側に切り込んだ棚が何段もあり、そこにはア氏の歳書が数十冊、花ビン、グラス、その他の遺品類がぎっしりと並べて



●アダムスキーの遺品類を見る

あつて、それをアリスがいていねいに説明する。更に少し奥へ行つてドアをあけると、大きなベッドが眼についた。簡素な部屋で、すべてがきちんと整理してあ



●アダムスキーの寢室

る。これがア氏の寢室だったのか！室内を見まわすと、ア氏の波動が充満していて高貴な雰囲気にも浄化されるような気がする。

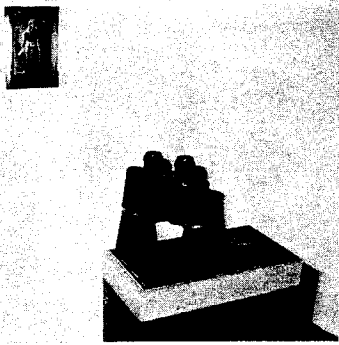
ア「彼はこの部屋が好きでした。(東部で死んで)ここへ帰って来なかったのはとても残念です。私は彼を家から出させまいとしたのです。というのは、彼は多年カリフォルニアに住んでいて、(死んだ年の)二月に帰ったときはかなり寒かったんです。そして二、三度肺炎にかかったり、ときどき心臓の発作を起こしていました。それで『もう出かせなさんな。もつと暖かくなるまで待てないの?』

と言ったんですが、ジョージは『いや、ブラザーズが今行けと言っている』と言うんです。だからブラザーズはアダムスキーがもうあまり長く地球にいないことを知っていたと思います。それで彼は行かねばならなかったでしょう。——彼はアーリントン墓地に葬られました」

久「ああ、ワシントン市の——」

ア「そう、ワシントン市です。彼はメキシコの国境で紛争が起きた当時、陸軍にいたのですが、全然、銃を手にしたことはなく、人を殺したこともありません。でも軍にいたのですから、それでアーリントンに葬られる許可が与えられたのです」

室内でアリスはアダムスキーが愛用していた双眼鏡を取り出して見せる。ずいぶん大きなメガネで、よく見ると七〇倍×七〇ミリと彫つてある。さほど古びてはおらず、皮ケースもわりと新しく見える。ケースは後に買い替えたのかもしれない。



● 双眼鏡

ない。どこの国の製品とも記してはな  
く、ただ「オメガ」という文字が眼につ  
いた。この双眼鏡でオーソンの見たのか  
と聞こうとしたが、しつこく尋ねるのは



● アダムスキーの双眼鏡を見る

やめて、私は無言のまま、ずっしりと重  
い双眼鏡をひねくりまわしていた。  
続いてアリスが戸棚からハミリカメラ  
を取り出した。見るとコダックの製品で  
これもわりと新しく、キズはほとんど  
ついていない。ズームレンズが付属して  
いる。記念にこれが欲しいな、という想  
念がチャッと起こったが、すぐに打ち消  
した。

室内をゆっくりと見まわしてから、更  
に奥の部屋のドアをあけて、ここが自  
分とマーサの寝室だという。ベッドが二  
つ並べてある。いかに老齢とはいえ、婦  
人の寝所まで見せるとは、よほど私を信  
用していることだろう。感謝してその部屋  
もカメラにおさめてから、もとの広間に  
帰った。

ふたたび椅子に腰をおろして、いろい  
ろ話していると、私がかつてア氏を日本



● 8ミリ撮影機を見る

へ招待しようと計画して実現しなかった  
件が話題となった。  
ア「彼が日本へ行ってあなたに会えなかつたのはとても残念でした。パンソン氏が日本へ行ったのをおぼえているでしょう？」  
ア「ジョージがあなたの住所を彼に知らせたと（パンソンが）言っていました。彼が日本へ行くと言っているので、ジョージがクボタに会えと言ったんです。パンソン氏は『クボタに会って嬉しかった』と言っていました。彼はすてきな人だったでしょう？」  
久「そうです。すてきな人でした。——彼は死んだのでしょうか？」  
ア「そうです。彼は家用機で飛んでいきました。息子さんを大学へ連れて行った帰りのことで、低く飛びすぎて高圧線にひっかかったんです。機体がこわれて彼は死にました。彼はこちらへ来たことがあり、私も会いました。ビスタではありません。パロマー・テラセズのことです。彼はノースキャロライナ州、ウインストンセーレムの富豪の出身で、製造会社を経営していました。電子製品などです。あの頃かなりの実験をやっていたよう、アダムスキーは最大の人物だと言っていました。徹底的にアダムスキーに打ち込んでいました」

久「飛行機の墜落事故で死んだのですか？」  
これについては別方面からの情報で、米国のある機関が機体に爆弾を仕掛けたということをおぼえてから聞いていた。  
ア「そう、家用機ですね。彼はかなり大きな飛行機を持っていました。たしか四人乗りだったかしら——。家用機としては大きい方だわ」  
久「四人乗り？ 家族の人はかり乗っていたんですか？」と私は感違いで尋ねた。  
ア「息子さんを大学に連れて行った帰りなのです。たぶん霧が深くて視界がきかず、それで電線にひっかかったのです。あまり低く飛びすぎたんですよ」  
久「ああ、それは気の毒でした」と私は哀悼の意を表した。お嬢さんが当時名門スミス女子大へ行って飛行機の操縦がうまかったと京都でパンソン氏から聞いたので、あるいはそれが操縦していたのか等、いろいろ尋ねたかったが、なにせ他にもア氏のことや質問が山ほどある。それで話題を変えた。  
久「アダムスキーは『同乗記』の中で、母船に乗っていたとき、ポケットからタバコを取り出したときと書いています。彼はふだんタバコをすっていたのですか？」  
ア「ええ」  
久「ヘビー・スモーカーですか？」  
ア「そうでもありません。何事も適度にやれば害はないと言っていました。でも

タバコをすわなかったらもっと肺のためによかったんじゃないかしら。しかし彼も私たちみんなも当時はタバコをすっていました。しかし火事のとときにマーサも私も煙をたつぷり吸い込んだので、それ以来タバコはやめていませう」と言っていてアリスは朗らかに笑う。

久「彼は酒を飲みましたか？」  
ア「ええ、ときどき飲んでいました。夕食の前とか社交の場ではカクテルのようなものやっています」

ここでマーサのことが話に出た。アリスによると、マーサ・ウルリッヒは若い頃、幼稚園の先生をしていたが、現在は八十一歳で（ステイヴは八十五歳だと言っていた）、今でも車を運転し、たいそう元気だという。ドイツ系だが、彼女はイリノイ州ベオリアで生まれた。

ア「ジョージはよくドイツ語の手紙を受け取っていました。それで『マーサ、これが読めるか』と言って渡すと、見事に読むので、『何と書いてあるんだ？』と聞くと、マーサは『わからない』と言います（笑う）。彼女は読むことを学んだのですが、意味はわからなかったんだわ」と言っていた。かたわらのマーサも笑う。

続いて私は日本GAPの活動状況を紹介し、アダムスキー哲学の習得の困難さを語ると、彼女は説明する。

ア「どんなに読み返しても、なおも読み続けなさい。多くの人が手紙をくれて、『何度も読み返すと、最初に読んだときに気付かなかった点に気づく』と書いています。それで私も言うのです。『そう

それを生涯続けなさい。そうすれば気付かなかった重要な点に気付くでしょう』と」

そのあと金星文字を解説して円盤の推進原理を発見したというバン・デン・バーグの話になった。それによると、アダムスキーはバーグに対して、早まって発表するなど強く忠告したにもかかわらずバーグはそれを聞き入れず、新聞社へ知らせたため、UPまで取り上げて報道したので騒ぎが大きくなり、それがバーグの最後で、何者かに誘拐されて、以来どこへ行ったのかわからないという。

アリスは食堂の一隅のテーブルに飾ってある各種の置き物を見せようと言った。木彫りの見事な仏像めいた作品を見せて、これが過去世で芸術家であった証拠だという。

ア「私たちがメキシコ市へ行ったとき、この中国製の木彫り像を見て『私があるを作ったのよ』と叫んだら、ジョージが『静かにしなさい。公衆の面前でそんなに騒ぐものじゃないよ。もちろん、あなたがあれを作ったんだ』と言っていますよ」

### ア氏は古代中国にいた！

どうやらアリスは今生でこの木彫り像を作ったのではなく、遠い過去世で作った作品を偶然に見つけて持ち帰ったと言っているらしい。そのそばに大きな水晶玉が置いてあるので、取り上げてみた。

ア「それはアメリカ・インディアンのある王女が持っていたもので、アダムスキー



●水晶玉を見る

ーに与えられたんです。その玉を見つめて、中に何か見えますか？」

私には何も見えない。  
ア「アダムスキーはそれを見つめると、中に何かが見えたんですが、それはただ『焦点』にすぎなかったのよ。彼は実際にはこんな道具を必要としなかったんです。彼は何の道具も使用しませんでした。ゆるい物事を見透すことができたのです。」

——これは昔の中国の刺繍です。中国の品物を見ると私には強い印象が浮かびます。私は過去世で何度も中国人だったと思うわ。それがジョージ・アダムスキーと知り合った理由の一つだと思えます。だって、私は古代中国の時代に彼を知っていたのですから——」

アダムスキーが過去世において古代中国の偉大な思想家で指導者だったという

ことは、あとでフレッドもイングリッドもアリス・ポマロイも述べている。だれであったかは判然としないが、とにかく古代中国にいたことはア氏がこの人々に語った事実らしい。そしてその後別な惑星へ帰り、イエスの時代にまた地球へやって来て聖書中のある人物と重要な関係を持つようになった、ということであるようだ。

続いてアリスは食堂の壁にかけてある賞状みたいなものを指さして説明した。ア「これはジョンソン大統領から与えられた表彰状です」

アダムスキーの宇宙問題に対する業績を認めてジョンソンが特別に表彰したのかと思って文面をよく見ると、そうではなくて、昔アダムスキーが退役兵であったために贈られたものらしい。そばでアリスがやはり同じような解釈をして話した。つまりアールリントン墓地に埋葬された退役兵であったというので国家が下付した証明書みたいなものだろうと言う。その他各国の個人やグループからア氏に贈られた記念品や置物類を次々と説明する。マーサもそばへ来て、明日は写真のアルバムを見せようと言う。アリスの話によると、これは面白いことになるぞ、と私は期待に胸がはずんできた。

ア「実際、アダムスキー博物館が必要ですよ。ときどきアダムスキー博物館はどこにあるのかと尋ねてくる人がありますが、そのたびに、必要ながまだない」と答えているんです」

久「それは面白いですね」





●庭を案内するマーサ（裏側）

ア「たぶんマーサと私が死んだあとで出来るかもしれないわ」  
 マ「アダムスキーが旅行に出かけると、人々がいろいろすてきな品物をくれたものです。ここにはずいぶん保存してありますよ」  
 とすると、食堂に並べてある品物はほんの一部分で、大半はどこかへしまい込んであるのだろう。ア氏が特に愛用したのはオーストラリアのある協力が贈ったコアラグマのモデルだそうで、これは事務室の棚の上に置いてある。  
 ふたたび広間へひき返してイスに腰をおろす。質問は山のようにあるが、いざとなると口から出てこない。  
 そこで英語の文語体と口語体の相違について聞いてみた。アリスはなかなかの文筆家だから、こうした問題について、かなり専門的な具体的な説明をしてくれ



●家の左側面にて

るのではないかと思ったのである。  
 しかし期待はずれだ。英語は一語で多くの異なる意味を持つことが多く、むつかしい言語で——とかなんとか、ありふれたことしか言わない。そしてアリス・ポマロイのことに話題を変えてしまった。アリス・ポマロイは体が弱ったためにGAP活動から手を引いたというような意味のことを話す。私は別にアリス・ポマロイと文通を続けており、たしかに積極的な活動はやらなくなったが、関心を失ったわけではないことを知っている。ただ黙っていた。  
 マーサが裏庭へ出てみないかと、しきりに誘うので、台所を通り抜けて裏へ出てみた。彼女は両足が不自由で、赤ん坊のようなヨチヨチ歩きだが、本人は案外

●玄関前にて。左より、マーサ、アリス、久保田



平気らしい。家の周囲はかなり広い庭園になっていて、実におびただしい種類の樹木や草花が植えてあり、それを一つ一つマーサが克明に説明する。かつてこれらの植物をアダムスキーが非常に愛していたとのことで、この手入れはマーサの日課になっているらしい。裏庭の端の一段低い所で、ビスタの町を望見する。低い丘が多くて、白壁の家が散在してい



●食堂での談話

マーサが食事の準備をととのえたので、食堂へ案内される。アリスが正面の位置につき、私がその向かい側、マーサは私の右手、ハーさんが左手にすわる。食事は簡素なものだが、チキンがひどくおいしい。あ

る。商業地区はずっと遠くだとマーサが指さしながら説明する。二人で裏庭を巡って左横の芝生まで来て、ここでしばらく話したあと、玄関前へ出た。太陽はすでに傾いている。ここでアリスに出てもらって、四人で記念撮影をする。実に楽しい一刻だ。

さてふたたび屋内へ入って話を続けたが、時間もかなり経過して夕闇がせまってきた。室内にはいつものまにかあちこちに電灯がともされている。日本の家屋のように天井の中央に蛍光灯があつて室内全体を照らすのではなく、電気スタンドが数カ所に配置してあり、それで照明するから、こうこうたる輝きではない。

### パロマー・ガーデンズ

話題がパロマー・ガーデンズのレストランのことに移った。マーサの話によると、その建物はかなり長く残っていたが無法者たちが空屋を荒らし、窓ガラスをこわしたりドアをはずしたりして破壊されたので、今は跡かたもないという。久「大きなレストランだったのですか」ア「かなりの営業をやっていたわ。このレストランは旅行専門誌のホリデー誌に高く評価した記事で紹介されました。ダニキン・ヘインズ氏が紹介記事を書いたのよ。そんな店はほかになかったものね」

久「なぜその店をやめたのですか？」するとアリスは長い話を始めた。ア「カリフォルニア工科大学の天文学部のジョーゼフ・ジョンソン博士が、パロマー天文台の二百インチ望遠鏡と十八インチで観測するためにパロマーへ登って来ることになったんです。このジョンソン博士のお母さんがあの六インチ反射望遠鏡をアダムスキーに贈ったのですが、それは私たちがラグナビーチにいた頃のことです。だから博士は

アダムスキーが六インチを持っていたことを知っていたわけですよ。その頃すでに私たちはバレー・セントアの農場へ移動していました。それで博士が立ち寄ったのです。そして言いました。

『ジョージ、君がパロマー山へ登る道路の途中に住み家を持てたらいいんだがなあ。ぜひ来いよ！一般人は大望遠鏡を見学に来たがっているが、山へやって来ても休む場所がない。だから山上に住む場所を見つけてよ』

でも、いくら広い土地があるからといって、そこへ移動するのは困難でした。その（ガーデンズの）土地はインディアソと、ある大きな家畜会社が所有していて、彼らはその土地で他人が事業をやるのを好まなかったんです。しかしついに何とか交渉して、そのなかの二十三エーカーほどの土地を手に入れました。この土地は当時サンディエゴに住んでいたインディアソの婦人のものであったのです。彼女は白人と結婚していました。そして結局二十一エーカーだけを買って離れるときも同じ値段で売ったんですよ。私はロサンジェルス近くのグレンデールという所の山頂にウエルズ農場を経営していたんです。これは祖父のもので旅人用の農場でした。祖父は建設技師でシカゴにも大きな会社を持っていたんです。ところが例の大不況がおそったときに、あちこちに沢山投資していたものから、ひどい打撃を受けたんです。それで私がウエルズ農場を旅人用に経営したわけです。ですから料理などはずいぶんやったものです。それでアダムスキー

が私に言ったんです。

『あなたがこの事業(レストランの経営)をやるといよいよ。私は全然関係を持ちたくない。私は人々に(哲学などを)話すとにしよう。経営はあなたの方がいい』それで私は思いました。『これは大変なことになったわ!』料理の仕事からがれていたと思っていたからです。でもそうなることになっていたのでと考えて承諾しました。そんなわけでレストランは私の名になったんです。

しかしその後アダムスキーは土地の中心部を売って、私の記憶では奥の方の三・五エーカーだけを残したと思います。そこがレストランを売ったあとで移動した場所です。一同はそのテラセズへ移動しましたが、それがパロマー・テラセズです。そこへジャロット(プロップ)、ロジャー、デスモンド(レスリー)たちがやって来たんです。

久「テラセズという意味は？」  
ア「段々になった台地ですよ。あそこはね、かなりけわしい丘だからブルドーザーを入れて台地を作る必要があったんです。上段と中段と下段です。だから私たちはあそこをテラセズと呼んだのよ」

久「そこには沢山の家が合ったのですか？」  
ア「ノウ、アダムスキーに会いに来る人だけです。デスモンド(レスリー)が来たときはあわてたわ。ジョージは旅行に出でいたし——、そこへ移動したとき、彼は東部と中西部へ行つたと思います。それで請負業者を雇う必要があったのです。デスモンドは六月に来るとい

うので、それを迎え入れて滞在させる場所を作らねばなりませんでした。そういうことだったので。その頃はバレーセンターの住所になっていました。久「パロマーと発音するのですか(と私は「ペ」にアクセントをつけて言う)、それともパロマーですか(と今度は「ロ」にアクセントをつけて聞く)」。ア「パロマーです(とアリスは「ッパ」にアクセントをつける)。食べ物を食べませんか?(と私の食事をすすめる)彼は他の事を考えているようですね(とハリスの方を指さす)。私たちが山を売って海岸のカウステッドへ移動したとき、メキシコへ行こうと考えていました。メキシコが好きでしたし、生活費も米国より安かったからです。ところがキューバで紛争が起こったために、ジョージは、これは南米全体に影響を与えるだろうと考えて、結局アメリカにいる方がよいだろうというわけで、それでこのビスタに落ち着いたんです。ここへ来たのは一九六二年のクリスマス前で、二、三日かかって移動しました」

久「一九六二年ですか? 約十四年前のことですね?」  
ア「十三年前ですよ」  
ここで私がカールズバッドという町の名を聞くと、マールサが、それはすぐ近くの場所、大体に沿岸にそった各町はみな続いていて、その切れ目がほとんどわからないと言う。

ア「サンディエゴへ行くつもりですか?」  
久「ノウ、ノウ」

ア「じゃ、あなたの旅行にはサンディエゴは含まれていないのね。どうするかしらと思っていました。だって多くの人がサンディエゴの動物園へ行ったりするものね」  
マ「私はまだそこへ行つたことがないんですよ」

ア「そこにはコアラグマのように他にない物がありますよ。ディズニランドへは行かないんですか?」  
久「行きません。私たちはそんなものに興味はないんです」

ア「そうでしょうね」  
そこはとてもしゃないが全部見るのに三、四日はかかるだろうとマールサが言う。

久「私たちはアダムスキー関係の事しか興味はないんですよ」  
ア「日本でもアメリカで作られたショウを沢山放映しているんですよ?」

テレビの話が出て俄然私は十月二十九日に東京十二チャンネルから放映された『びっくり子大集合』を思い出した。私が提供したアダムスキー関係の写真が多数写し出され、ユニバース出版社からは私のかわりに菅原君が出演した番組である。

久「私たちがが発する前、日本の十二チャンネルから私が提供したアダムスキー関係の写真が放映されましたが、すばらしい番組でした」

これを聞いたアリスは急に涙ぐんで、オロオロ声になって言った。

ア「それでしようね。——私たちはジョージの十六ミリ映画を持っています。フレッド・ステックリングが十六ミリ映写

機を持っていて、彼の息子と一緒に日曜日の午後にはここへ持って来て上映します。テレビ局から要求があると、彼はそれを持って行くのです。彼は非常に積極的で、私たちは彼の援助を心から感謝しています」

このことをハーさんに説明すると、フレッドは何歳なのか聞いてくれと言う。私も彼らの年齢をいろいろ尋ねたが、これは日本人として別段失礼にならないという感覚によつたまでである。

ア「彼は三十九歳だと思います」  
久「三十九歳ですか。ステイヴ・ホワイティングは何歳ですか」

ア「たぶん二十二か三でしょう」  
久「ああ、ずいぶん若いですね」

ア「そう、まだ若いんです。ステイヴはメキシコにいたときひどい病気をしました。でもそれを克服して今はすっかり健康です。フレッド夫妻にはメキシコで生まれたとても可愛いエリシアという小さな女の子がいます。奥さんのイングリッドは愉快な女性ですわ。今彼女はひどい風邪をひいていて、あなたと一緒にパロマー山へ行きたがっていましたが、電話をかけたときには、とてもだめだろうと言っていました。ですから、あなたは彼女に会えるチャンスはないでしょう」

だが、この翌日はフレッドの家でイングリッドの元気な姿を見ることになったのである。奇蹟的に快復したと思えない。コーヒーマットと飲むか、それともアイスクリームがよいか、クッキーがよいかとアリスが尋ねるので、アイスクリームがよいと答えると、持って来るよ

うにとマーサに命じる。どうやらアリスが主でマーサは従の關係にあるらしい。

### 日本人を讃える

マーサが出してくれたアイスクリームをおいしくいただいていると、「サフ」という物があるか、それは食物なのか、とマーサが私に尋ねる。何か日本の食品のことを言っているようだ。

久「サフ？」

マ「そう。よく知らないけど、食料品店の棚に沢山あるわ。みんな知ってるらしいのよ」と、マーサがガラガラ声で怒鳴る。私には何のことやらわからない。

ア「カリフォルニアには沢山の日本人がいて、ガードナーや農業をやっていますわ。みな立派に成功して——」

久「農業や、ガードナーになって？」

ア「そう、農業をしたり花を作ったりしてね。みな立派に成功してるわ。マーサはね、むかし幼稚園の先生をしていた頃日本人の子供を受け持ったことがあるのよ。もちろんグレンデルには日本人の家族などがいて、花を売る店を経営していたわ。そしてマーサの幼稚園の自室に飾る花をよくくれたものです。マーサの話によれば、日本人は最もチャーミングな人種だというのよ。彼女は日本人を心から愛していました。日本人の子供たちはたいそう行儀がよくて、他人を尊敬しあらゆる物の鑑賞眼を持っていたというのですよ」

これはかなり昔の戦前の話であって、今の日本のダラシない子供たちのことを

言っているのではないな、と思いながら私は複雑な気持ちで聞いていた。マーサが話し始める。

マ「朝、ときどき私が起きて、幼稚園で飾る花が欲しくなると、幼稚園から数ブロック手前で降りるんですよ。すると、あるとき小さな日本人の少女に、一緒に車に乗って行かない？と尋ねたら、その子が一緒に乗って行くと言ったけど、ちよつと待ってと言うの。そして自分の店に引き返してスイートピーを持って来てくれるんですよ。それで『そんなに気をきかせることをだれから教わったの？あなたのお母さんはいないそう忙しくて五人も子供がいるのに——』と言ったんです。その母親は店の奥でミシンとアイロン台を持っていて、縫いものをやっており、少しも余暇がなかったのよ。よくそこへ行って話したのですが、あるとき、『気をきかせることをだれが教えたの？』と尋ねると、だれもそんなことを教えた人はいないと言います。これは日本人の天性だと思えますよ。私はその家族と非常に親しい間柄だったけど、両親が礼儀正しい人だから子供も礼儀正しくならずにはいられなかった例だと思えます。クリスマスマスの頃になると、自分の受持ちクラスに日本人の子供をかかえている先生は、鉢に植えた植物をもらって飾っていました。毎年、どの先生もそうなんです」

これは日本人特有の（特有ではないかもしれないが）いわゆる「袖の下」のことを言っているのか、それとも本当の親切心を意味しているのだろうか。どうも

よくわからないが、少なくとも戦前は軍国主義時代だったとはいえ、もっと日本人は礼節をわきまえていたような気がする。

### フレッドが活躍する

久「ここで、ときどき集会を開きますか？」と私は話題を変えた。

ア「フレッドがアダムスキーのフィルムを映写して見るようになってから、やっています。もちろんジョージがいた頃は集会をやっていました。しかし個人はその首頭をとってはいません。入口まで来る人には私から話をします。ジョージがバロマーにいたことを知っている人たちがバロマー山へ行ったりすることもあります。バロマー山で郵便局をやっている人たちはとても親切で、この住所を人々に教えてあげるんです。それでここへやって来ます。ときには電話で約束をする人もあるし、ときには入口まで来る人もあります。そんなふうにして来る人には私が話をします。フレッドが土曜日の夜ここで集会を開きます。

あなたがバロマー山から帰って来たらディナーを開きますから、そのときフレッドが機械一式を持って来て、ジョージのフィルムを見せるでしょう。別なグループがジョージのフィルムを火事のあとで持って行きました。それを取り返すのは困難でしたが、その後そのフィルムやテープを取り返しました。そしてフレッドがそれを持っていて、編集し、うまくやっています。たいそう興味深いフィルム

ムです。（UFOの）スライドも映画もたいそう立派なものです。フレッドの若い息子（グラン）が機械を操作します。数週間前にここでとてもすてきな会合を開きました。彼の友人たちがやって来たのですが、私は初めて会う人ばかりでした。みんなはとても興味を持っていました。私自身は公的な仕事をやっています。でもジョージが講演会に行ったりテレビに出演したりするときは私もついて行きました。サンフランシスコにもついて行きましたが、私は講演したことはありません。私が講演しようと思えばできたでしょうが、やったことはありません。ここで集会を開くときに人々も質問をすると、フレッドが「ウェルズ夫人が私よりもよく知っていると思えます」と言うので、そのときは私が非公式に答えますが、公式な講演で演壇に上がったことはありません。私にはそんな力はないんですよ」

久「アダムスキーがここにいた頃、スペース・ブラザーズが来たことがありませんか？」

ア「ええ、先にも話したように、夜間しばしばここへ立ち寄ったものです。ロサンジェルズとサンディエゴにグループがいて、ここを通過するときには立ち寄りました。ほとんど真夜中です。ブラザーズはそれほど睡眠を必要としないらしいので、夜間にドライブするので。ときどき彼らは台所にすわったりして、他人の迷惑にならぬように、そこだけライトをつけていました。コーヒータン

トコーヒーを作ったりしました。そして今日の午後にも話しましたように、ブラザーズは私をぐっすり眠らせるので、物音も聞かなくなつたし、眼が覚めることもないんです。そして翌朝起きてから、ブラザーズが来たことがわかるのです。彼らと与えるフィリングなんでしょう。マ「あの人たちは波動を放つたんでしょうね」

ア「そうね、波動でしょうね。それで私が言うんです。『昨友、友人がここへ来てんでしょ？』するとジョージが『どうして知ってるんだ？ 見たのか？』話し声を聞いたのか？』と聞くもんですから『いいえ。でも今朝起きたらそのことがわかるんですよ』と答えるんです。ときたま朝起きたときに、ブラザーズがシツプに乗ってやって来て私たちに上空から祝福の想念を送ってくれたような気がすることがあります。私が書物を書いているとき、タイプライターを出して、さて何を書こうかと考えることはありません。書き始めてから終わったとき、私は上を見上げて考えます。『ああ、本当に面白かった。書いた内容はすっかり忘れていた事なのに——』と。でもこういうことがあつたんです。ですから何か私に働きかけた波動のようなものがあつたと思います。これは機関誌の記事を書いてるときも同じです。私は多くのインスピレーションナルな原稿を書きましたが、あとで、うん、立派に書けた、でも本当に自分で書いたのかな、と思うんです。何か私に書かせたのでしょうかね」

ハーさんがそばからNASAが宇宙人

の件に関して近く発表するらしいが、そのことを聞けと言う。それで質問してみた。

ア「そうね、NASAは発表しないとと思うわ。宇宙飛行士たちは自分で目撃した事柄を公表すると警告されていますからね」と言つて、あとで新聞の切り抜きを見せようと言う。そして、あまりここに長くすわつていると体が固くなるので動いた方がよいとつぶやくと、マーサもあちらの部屋へ行こうと誘いかける。そこで一同は広間へ移動した。

### アダムスキーはオーラが見えた！

腰を落ち着けてから、今度はアダムスキーの超能力の話になった。テレパシーや遠隔遠視力をア氏が持っていたことはわかつているが、それがどの程度のものか知りたかったのである。するとアリスが興味深い話を始めた。

ア「あれは生まれつきの能力ですよ。だつてアダムスキーは人の心を読みとることができたんですもの。私がむかし彼のグループへ初めて入つた頃、私が車を運転していて彼がそばにすわりながら、私をじつと見つめていたんです。それで、『何をそんなに見つめているのですか？』と尋ねると、彼が言うんです。『あなたのオーラを透視しているんだ。あなたの私のグループに適した人かどうかを見ているんですよ。あなたのオーラを透視して過去世のを見ていたんだ』

彼が集会を開いていた頃、人々がやって来たものですが、ときどき彼はどんな話から始めましょうかと聞くんです。そしてときに何かの話題で始めると、だれかが質問をします。そうすると彼は『ちょっと待って下さい。この話が終わるまでは私の想念の邪魔をしないで下さい。終わってから答ええます』と言つて、一通り話し終わると、さて何の質問でしたか、と聞くのです。そうすると相手がいいます。『あなたはもうお答えになりましたか？』。私たちが心を読みとれるのですか？』。彼はすでに答えていたのです。ですからだれでも自分の望む事を心に思い浮かべてよいのですが、彼は自分が接した物事のすべてを知覚していたわけです。言い替えれば、それは他人から来るフィリングをキャッチするようなものです。そうね、彼は接触したあらゆる人とフィリングによつて生きていたのです。それで彼は自分が会つたあらゆる人から何かを学んだと言っていました。それほど謙虚だったのですよ」

久「じゃ彼はオーラを見ることができたんですか？」

ア「そうです。人体やあらゆる物には周囲にオーラがありますが、特に人体から色を帯びたオーラが放射されています。これは人間の発達に応じて色が変わるのだと思います。言い替えれば、それは人体から放射されるフィリング、それは人体が色を持っていくわけですね。音楽の音調にもそれぞれ色の関係があることが発見されています。個々の音には相応する色があるんです。だから人体から放射されるフィリングも同じだと思つてます。そのフィリングがある色を帯びたオーラを人体の周囲に作り出すのでしようね」

久「オーラは人間の想念に応じて多くの色があるのですか？」

ア「ええ、個人の想念に応じて色も異なります。人々のなかには生まれつきオーラが見える人もあるんですよ」

久「オーラの最高の色は何ですか？」

ア「そうね、それはちょっと言うのがむづかしいわ。明るい紫色または青色でしょうね。そういう色は高い波動を持っています」

私はここで超能力者でオーラの見える某氏の話思い出した(注：日本誌第四十九号に掲載した『オーラの見える人』を参照されたい)。

久「私はオーラの見える人から、私のオーラは紫色だと聞いたことがあるんですがね」

ア「それはいいわ。それはあなたが発達している証拠ですわ。紫色はすぐれた色です。多くの人は紫色は精神的な色だと考えていますが、私は『精神的』とか、『肉体的』というような区別はないと思つています。みんな一つなんです。みんな創造主の表現ですよ。あらゆる物を同じ明るさで見えるようになると、精神的とか肉体的とかいう区別もなくなります。それが生きた常識です。私たちはこの地上に生きているのですから、みんな生きて自分のレッスンを学ばねばならないのです。イエスは『私はこの世にいたが、この世のものではない』と言つたようにです。私たちはこの地球を取り巻いている低次元な波動を取り除く必要はありません

ん。別な惑星から来たブラザーズのなかにも、それに耐えることのできない人もあります。彼らはある使命を帯びて来るのですが、周囲の低劣な波動が厚すぎてそれに耐えられないことがあるんです。あの人たちは超感覚的ですからね」

そばで黙々としているハーさんを、アリスは「たいそうセンシティブだ」といって、ほめそやす。そして言葉はわからなくてもフィリングこそ万人共通語だという意味のことを話す。

ア「それは個人の意識的知覚から他人へ放射される波動ですよ。ジョージがまだここにいた当時、ある日曜日に一人の男が来たことがあります、文字を書いた紙片を取り出して、自分はツンポでオンだと言っています。そこでジョージが最初直接に話しかけたのですけれども、それは相手の意識に語ったわけですね。ところがその男はそれがわかるんですね。ツンポなのに理解しているんです。そして別れるときに『有難う』と言ったんです。それで男は自分が話せることに気付いたわけですね。意識はツンポやオンなどを超越していますからね。視覚、聴覚、味覚、嗅覚などは肉体の四つの感覚器官ですが、フィリングは知覚・意識で、これは独立して働いています。だから盲目の人がピアノを弾いたり、すばらしい事をやったりするんです。その場合は指が実際に見えているわけで、触覚は基本的な感覚です。人間は指の感覚をいかに発達させることができるか、ご存知でしょう」とアリスはなおも生命の科学の講義を続けたが、これは読者も熟知しておられる

から、省略しよう。  
久「あなたはジョージの助手として何年間仕えたのですか」

ア「おお、私は彼のグループに入ってからすぐに彼と非常に親しくなりました。私はどこへ行くかと自由な身でしたが、彼はどこへ行くか聞いてくれましたが、彼は奥さんがありましたが、彼女はいくらもグループを離れていた期間がありました。それで私が彼の仕事を援助したのです。私にできることは何でもやりました。グループがラグナビーチにいた頃、マーサが幼稚園の仕事が終わってから私と二人で週末に出かけて行き、金曜日の夜にジョージが講義をしてくださいました。その頃ロサンジュルス近くのパスadenaで彼はレッスンを受け持っていましたから、土曜日の朝、私たちが彼をパスadenaへ連れて帰るんです。弟子のなかにジョンソン夫人がいて、この人はインドへ行きたがっていたために、ラグナビーチの家を売るつもりで、それをジョージに譲ろうとしたんです。しかしジョージは金がないので買えないと言ったんです。するとある母親と娘がやって来て、グループに大変な関心を持った上、その家を買ったんです。で結局うまくいって、私はそこにいたとき多少とも家事仕事をやりました。買物をしたり、あらゆる切りまわしをやったのですが、うまくゆきました。経験があったし、それに家具などもありましたからね。というのは祖父のウェルズが死んだときに家具類を全部もらったんです。それをビーチへ運びました。(ここでアリスはアダムスキー夫人が、と言いかけて言葉をにご

したので、あとはよくわからない)それから私たちはそこを離れてパロマーへ移動しましたが、彼女(アダムスキー夫人)も一緒に来て、山上でレストランを聞いてからは、よく働きました。彼女の仕事はいつも庭の手入れをすること、とても庭を可愛がっていました。

ラグナビーチにいた頃、スエーデン人の男がいて、これは庭師でしたが、授業料を払うかわりに花の手入れや庭仕事をとてもよくやってくれて、ラグナビーチでは庭仕事の重労働でメリーを助けていました。パレーセントターの農場にいたときも同様でした。しかしパロマー山へは来なかつたんです。彼はその頃までにはスエーデンへ帰っていたと思います。というのはスエーデンに森林地を所有している、それをまともな状態にするのにトラブルがあつたからです。私はその頃三十四歳でした。アダムスキーのために献身的に働いたものです。『あなたはアダムスキーの何だったのか? 秘書だったのか?』と聞く人がありますが、そのときは『そうですね、私は家政婦、庭師、お抱え運転手、洗濯婦、料理人、タイピストでした』と答えるんです。もちろんアダムスキーはよく旅行に出かけましたから、そんなときは私が代筆して返事を出すんです。エリシアが山にいた頃は代筆の仕事もよくやってくれました。彼女が去って行つてからは私があらゆる仕事をやり、手紙の代筆も一切引き受けました。私の記憶では、あなたから(久保田から)手紙が来たらそれを取っておいてアダムスキーが帰つて来ると、それを見

せるんです。そして彼が回答を必要とすると考えたら、返事を出していました。マーサも郵便物の処理ではよく働きました。

ロドファー夫人が来たときは大変でしたわ。まるで秘書学校か会社みたいで、マデリン・ロドファーはテーブルの上にアップライト・タイプライターを置いて仕事をしていましたし、マーサはソファにすわってヒザの上にポーターブル・タイプライターをのせて郵便物の返事を打っていました。今でもかなりの仕事がありますが、年齢というものは態度の問題で精神的に非常によく働いている人もいますのでね。でもアダムスキーが私たちに与えてくれた教えを守って理解していることは、たいそう幸せなことだと思います。そう思いませんか?」

### 大変動について語る

少し沈黙が続いたあと、ハーさんが、「同乗記」に出てくるオーソンの言う世界の大変動について質問してみてください。

久「オーソンは(地軸の傾きによって)世界に大変動が起こると言っていますそれが本当だとすると、どんな事になるのでしょうか?」

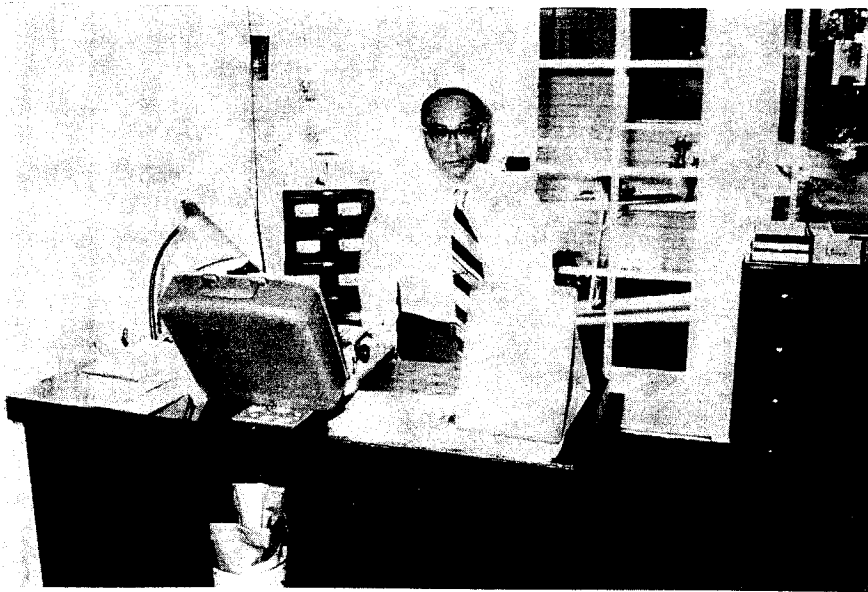
ア「そうですね、多くの心靈主義の人は起こりもしない、心配してもどうにもならない事をいろいろと予言しています。果たしてそんな事が起こるかどうかはだれにもわかりません。現在、この地球にある放射線が放射されています。そ



れを感知できる人にとっては、そしてその放射線と一体化してまじめに考える人には、どんな大変動も起こらないでしょう。

他の文明が破壊されたようにこの文明も破壊されるかわりに、創造的な方向へ向かう能力や機会はあちこちにありません。私たちが自分自身を理解して生命が永遠であることを知れば、そんな事が起こるはずはありません。たとい起こったとしても私たちは意識的な知覚力を応用して、天国へ行き、肉体を他の場所へ持って行き、新しい体験を持ちます。そうすれば大変動の事を考えるよりも幸せになるでしょう。

充実した幸福感のもとに毎日を生きなさい。——あなたが宇宙の原理に従った生き方をすれば、幸せになります。そうしなければ、代価を支払うようになるでしょう。生活に対する態度が異なっていれば、その報いはすぐに来ます。毎日が学ぶための新しい機会です。同じ瞬間は二度とないからです。いつも大きな変化があるんです。私たちが発達の方向にあれば発達します。あらゆる物事、あらゆる体験にはいつも新しい意識的な知覚が生じて、それがレッスンを教えてくれます。大変動の事を考えるよりもその方がすぐれた態度だとは思いませんか？もし恐ろしい物事が起こることを期待していれば、たしかに災害があらゆる生活の楽しみを破壊するでしょう。福利関係に関する限り、だれしもすでに災害にあつたと言つてよいでしょう。少なくとも以上が私の感じていることです」



●アダムスキーが使用していたデスク。現在はアリスが使っている。  
●食事を終えて記念撮影。左より久保田、アリス、マーサ、堯。



ここでハーさんが、アダムスキーとオースンとの関係について質問を出したので、私が通訳して尋ねてみた。アリスはある驚くべき話をしたが、公言していいことだというので、ここでは省略しよう。アリスの話の根こそぎここで洩らすことは遠慮する方がよいと思う。

このあとアリスはアダムスキーがローマ法王ヨハネ二十三世から授与された問題の黄金のメダルと、常時身に付けていたという謎のクリスタルペンダントを出して見せた上、これらについて実に興味深い話を始めた。これは次のとおりである。  
(第一部未完、以下次号)

改訳決定版 INSIDE THE SPACE SHIPS

# 空飛ぶ円盤同乗記

金星の光景を見る! (10)

ジョージ・アダムスキー  
久保田八郎訳

SPACE CRAFT 8.00  
PHOTOGRAPHED AND  
BY PROF. G. ADAMSKI

●1952年5月1日、ジョージ・アダムスキーがパロマー・ガーデンズで撮影した母船。数個の丸窓が見える。左側のわん曲した黒い影は6インチ反射望遠鏡の筒。

●第13章 パロマー台地の日々

続く数カ月間、私は更に数度のコンタクトを体験した。母船内部と、地球人のあいだで正体をかくして働いている他の諸惑星から来た人々との両方とである。パロマー・ガーデンズは売却されたので、私たちは同じ山の数百フィート高い場所へ移動した。Flying Saucers Have Landed (邦訳版は「空飛ぶ円盤実見記」) が一九五三年九月に英国で刊行され、続いて十月にアメリカ版が出た。

ところで、この新しい土地の開拓には多くの仕事待ちかまえていた。そこにはカンの木がうっそうと茂っているばかりではなく地面は石ころだらけである。巨大な石塊をまるで羽毛のように持ち上げたり移動させたりした地球の古代人の知識を、たびたびみんはうらやましそらに語り合った。イースター島で見られる古代の大石像を適当な場所に動かした人々と同様に、ピラミッドを建設したエジプト人もこの秘密を知っていたのだ。しかし私たちが道路を切り開いたり岩石を掘り起こしたりするには、鼻息の荒いブルドーザーに頼るよりほかに仕方がなかった。

私たちの居住のためばかりでなく、私に会いに来て来る、しだいに増加する多くの人々をもてなすために、ここへ建てたいと思っていた簡素な建物(複数)の計画をしながら、この小人数のグループは活気に満ちた多くの夜をすごしたのである。パロマー・ガーデンズの買収者がそこを引き続いてレストラン兼休憩所として経営してくれることを私たちは期待していた。ここから何マイルものあい

だはそのような施設がないからだ。しかし何かの理由で彼らはそれを閉鎖することにきめたのである。そこで、私たちは召使いを雇っていないけれども、訪問のために山をわざわざ登って来る多数の人の難儀にかんがみて、儀礼として訪問者に食事を出さねばなるまいと感じたのである。

一同は、山の側面を切り開いた台地に好都合な炊事場をなんとかして建てることのできた。この台地の工事は結局大仕事だったが、数名の屈強な青年が奉仕的に援助してくれたのでついに完成した。一同の努力は十分に報われたのだ。台地の一部は大きなカンの木陰になっており、山々の峰を望見することができる。柔らかいパステル調の色合いで山のうしろにまた山がそびえ、最後の山は空のなかに溶け込んでいる。この場所に戸外用の椅子(複数)、ベンチ、ピクニック型のテーブルなどを配置し、炭火使用の小型コンロを購入した。

最初、私たちはこの土地に隣り合った地所にある友人所有の二軒の古い山小屋で精一杯の生活をすごしたのである。我々は例の炊事場を使用した、これは事務所、仲間の一人の寝室、天気の良い日の会合所としても役立つ。しかしまだ水も電気もない。山の側面の地下を清水が一すじ流れていたの、我々はこれをパイプで地表に出して、水がいつも新鮮であるように放水口のついた小さなプールを作った。これをバケツで運び上げるのである。

多くの施設にたいする夢や要求があっ

たけれども、支払いのための金ができるまでは前進もできないし、こうした建物を建てるわけにもゆかないことはわかっていた。したがって我々の生活は大抵の人にとつてたしかに不便な原始的なものに見えるだろうし、作業は難儀だったけれども、我々は所有物を楽しんで日常の難儀な雑事を楽にするために、ときどき加えることのできたどんな小さな慰めの種も、努力なしに得られる慰めの種よりはるかに大きな意義があった。

ようやく小さな家を一軒建てることのできるとわかった日はすばらしい日だった。その家の中には、天気の悪い日に訪問者と会談できるかなり広い部屋と、事務室用の小さな部屋が設けられるはずである。

我々は約四十キロ離れた小さな町に住むある請負師について知っていた。この人は正直な信頼できる人である。そこで交渉してみた。炊事場は全く我々自身と良き友人たちの手で建てられたもので、その人たちのなかには多年にわたって宇宙の法則の教えを受けた私の門弟も数人いる。その最初の小さな建物は業績を可能ならしめた友情と忠実のしるしとして私にとつてはいつまでも大いなる意義をもつものとなるだろう。

だが今度はほんものの請負業者に頼むことができたのだ。彼は非常に立派な人であることがわかったし、私の仕事に興味をもつようになった。その小さな木造家は急速に完成した。快適な工合に諸設備をするだけの金があまったので二つの小さな洗面所もとつつけた。その

間にはシャワーもある。この文章を書いた時から数週間後までは電気がなかったけれども、水はパイプを流れていた。冷たかろうが、ちよちよ水だろうが問題ではない。電気が通じるのを長く待ったが、それは今や光熱を供給し、ソーソクや石油ランプを廃物にさせてしまった。これはもう一つの喜びであり、待った甲斐のあるものだった。

一同が建築作業に精出していたあいだ大勢の動物をなんとかして飼ったが、これは野性のままで馴れた。二匹の犬と六匹のネコである。ときどき彼らの仲間であるスカンクが行儀よく訪ねて来たことはいうまでもない。こうした動物でひどい害意をもつものでも、敵愾心をかきたてられぬときは馴れて可愛らしくなるもので、相手を見るとそれが友であることがわかるのである。彼らはネコの鉢でミルクを飲んだり犬とともに食事をしたりにして、互いに争うことはめつたにない。ときとして犬の一匹がそれを問題にしようとして侵入者とびかかり、大声で吠えたと、スカンク氏はおだやかに急いで山腹の方へ退却するだけで、怒ったふりをして尻尾を立てるにすぎない。

米国中西部、ニューヨーク、カナダなどへの講演旅行の合間には、あらゆる力をふりしぼって私は家屋の完成に働いた。仕事を中止するのは友人や、会いに来た多数の来客と話すときだけである。東海岸方面と英国での講演予定があったのだが、カナダにいたとき私はひどく疲れて声が出なくなってしまう。講演は切迫しているし、私が最も深く考えてい

る問題を討議するときに体力を節約する方法を私という人間は知らないらしい。正式な講演に加えて、当然のことながら多数の聴講者があつて質問をしたが、この善良な人々が私に近づく前に講演会場から逃げ出してしまふという忠告がわるくないものだと知りつつも、ついでに許したのである。その結果、もはやしゃべることができなくなつてしまつた。医師は東部と英国の講演予定の取り消しと、少なくとも六カ月間の絶対安静を命じたのである。

この宣告は種々の明白な理由により私にとつて非常な失望となつたが、結局やむを得ず従わなければならなかつた。愛する山へ帰つてからまもなく声が出るようになり、訪問者が来たときぐらひは話させてくれと駄々をこねた。

ここで「あるセンス」と一同が言つてゐるような、そのセンスでもって私を振舞わせようとする人たちにとっては、私は厄介なものであるにちがいないと思ふ。たぶん私は何もセンスを身につけていないのだから。だが私を探し出した人々に対してどんなに私が心身をすりへらしても、多くの面で多大な報いがあることを知っている。

一九五四年の六月にデスモンド・レスリーがパロマーへやつて来た。私の計画が遂行できたはずではニューヨークで初めて彼に会つたはずである。これは非常な喜びだつた。きわめて他人の興味を起させるような心と、愉快なユーモアの精神を身につけてゐる彼は、我々のグループに多くのものを加えてくれた。我々

々の共通の関心事に興味をよせたばかりでなく、まじめな話題からリラクセスする必要が起つたときにはナンセンスな話を始めて一同を大笑いさせたりした。

約一カ月だけ滞在するつもりだつたのに、デスモンドは八月の終わり頃まで一緒にいた。一九五六年には延期された講演旅行を実現させるためにイングランドへ行くので、そのとき彼と再会するのを楽しみにしてゐる。

大体のところ、他の世界（惑星）から来た友人たちとの後のコンタクト、この世界（地球）のあらゆる種類の良き友人たちの増加、健康によい戸外の仕事、本書の資料のまとめなど、私の日々の生活はたいそう充実して楽しいものになつてきた。ときどき友人たちがいいやな態度で私を見始めたときは、休息もとつた。

まもなく我々は新しい家屋の用途を拡張する必要があることに気づいた。そこでデスモンドの到着する直前に、寝室を一つ増築するために、討論や非公式の講演ホールとして設計していた大きな部屋の中央に仕切り壁をとりつけた。実際には私たちの一人はまだ古い小屋に寝てゐたし、他の一人は依然として炊事場にベッドをおいていたのである。そこで今度はこの新しい段取りによつて講演ホールは二分され、その半分に私が寝ることにしたが、これは正規の寝室であり、簡易寝台つきの事務室ともなつた。その後まもなくベニヤ板を敷いた地面に小型テントを立て、上半分に布を張りめぐらして

眠り心地のよい寝所を作り上げたときは、一同たしかに恵まれてゐると感じた。こうして私たちはベッドを炊事場から解放したのである。

私はいまだに水をパイプに通したり貯水タンクから出したり、地面に施設したりする仕事をやつてゐるが（これは数名の有能な女性の助手が手伝つてくれるのだ）、その結果を心から誇りに思つてゐる。以前の洗いバケツやシャワーのちよるちよる水は今や激しい奔流となつてゐるし、カシの木の下には本物の小型プールを作り、そのふち石の周囲には花も植えてある。ちよろど今朝がたは家の下からセメントのキュービッドとツルを取り出してプールの中においた。これはとても楽しそうに見える。

私たちは骨折つて働けけれども、みな

## ●第14章 饗宴と訣別

宇宙人との最近のコンタクトは一九五四年八月二十三日に発生した。その当時

デスモンド・レスリーは講演予定を果たそうとしてロサンゼルスにいた。彼は私がこのコンタクトをしようとしてゐることを知つており、一緒につれて行つてくれとしきりに懇願した。私もこのことを望んだのだが、ブラザーズはこの願いを拒絶したのである。彼らはその理由を明かさなかつた。考えてみると、これは今回私に見せて証明されたある物事の性質が、これまでコンタクトをしたことの

幸せだ。山々はいつも眼前に横たわり、夜明け、白昼の日光、夕日などにより美しさが変化して決して飽きることはない。夕暮れときは月光に輝くかまたは星々の満ちた空に黒く浮かんだりして特にすばらしい。

そして時折、上空にきらめく円盤を見る。たしかにこの数週間というものは UFO が近隣の町や都市で多数の人に目撃されてゐる。私たちは彼ら宇宙人が頭上に、そして全世界の上空にゐることを知つて満足してゐるし、遠からぬ将来、世界中の人々が UFO を見てその正体を知つてゐる多数の人々が人類のために確信をもつて語り出すのを私たちは望んでゐるのである。

ない人にとつて不向きだつたからだと思ふ。

友人のファークンとラミューがいつものとおり迎えに来た。小型円盤に向かう途中、ファークンが言つた。

「実は今夜の会見があなたと私たちにとつて別れとなるでしょう。今夜あなたをホテルへお送りしてから、私たちは小型円盤へ帰り、次に母船へ帰つて、それが私たちをホーム惑星へ運ぶことになつてゐます。地球での私たちの使命は終わったのです」

大いなる悲痛の念が大波のように内部にわき起こってきた。

ラミューが早口で言う。「しかしあなたには肉体の形でのみ私たちと別れるのです。どこにいてもやはりテレパシーで通信できることを忘れないで下さい」

この考えでホッとしましたものの、その瞬間、まだ物足りないような気がした。

するとファークンが言った。その声は理解に満ちている。「あなたは私たちの友人です。両者のあいだに広がるかもしれない空間のすべては、決して友人関係を交えることはできません」

私は自分の感情を恥じた。この気持ちを完全に消すことはできなかったけれど、ある程度までなんとかしてそれを克服した。

ほかに一人またはそれ以上の宇宙人の「コンタクトマン」がいて、地球上に一時的に住みながら、いざれ私に会うように定められているのではないだろうかとか考えてみたが、この無言の質問には回答が与えられなかった。これはほんとうに別れになるのかも知れないという気持ちが残ったが、少なくとも当分の間、今ドライブしながら私を真中にしてすわっている二人の友人に対してばかりでなく、大気圏外への宇宙旅行とも別れになるのかも知れない。

おわかりいただけると思うが、この感情は今夜私が見ることになっていった新たな、すばらしい物事に一段と感謝の念をわき起こさせ、それが私の深い認識を早めたのである。このことは、すでに許されてきた物事に対する感謝に加えて、言

葉ではあらわせない充実感を心中に生じさせた。

同じ小型円盤での飛行についてはすでに詳細に述べたので、ここではオーソンと、いつでも離陸できるように準備のできた小型機が、わずかに地面上に浮かんで待っていたとだけ言っておこう。

この飛行中、私たちはすわりもしなかった。私は注意力を分けて、変化するグラフと、操縦パネルに向かっていているオーソンとを注目した。

金星の母船に入ったとき、今度は奈落へ落ち込むような感じは全然しなかった。最初の体験のときと同じようにプラットフォームへ到着して、そこで再び停止する。小型円盤にクランプを取りつけてリチャージするために見覚えのある人がいたが、今度は彼も階段を下りて一同

について来て、休憩室へ入った。室内へ入ったとたん、私は祝宴の空気を感じた。これまでに会ったことのない非常に大勢の人が出席しているのだ。イルムスとカルナがやさしく迎えに出て来るのを見て、私は嬉しくなった。

「私たちが今夜あなたを驚かせようとしている計画をだれかが話しましたか？」とカルナが尋ねた。そして彼女は私の返事を持たないで熱心に続けた。「あなたとのある約束が果たされることになっているのです！」

カルナが話しているあいだに、イルムスがおいしそうな果物のジュースを入れた台つきグラスを私に渡してくれた。二人ともパイロットの制服を着ていることに気づいた私は、これは宇宙旅行を意味

するのだと確信した。

大勢の男がおり、婦人はカルナとイルムスを含めて八人ほどいる。他の婦人たちは、私が最初にイルムスとカルナに会ったときに二人が着ていたのと同じ種類の美しいガウンを着ていて、男たちは着心地のよさそうなシャツとズボンを身につけていた。ここでも全部の人がサンダルをはいている。

紹介はされなかったが、だれをも見落とすことはなかった。みんなが私を友人として挨拶してくれたからだ。私の名を呼んだ人も数人いた。挨拶が終わると、どこからともなく静かな音楽が響いてくるのに気づいたが、どうも東洋的な調べを思い出させるものがあつた。

ラミューもジュースのグラスを手にしたけれども、他の友人たちが私たちに加わっていないのに気づいた。これをイルムスが説明した。「私たちはカルナが言ったある驚くべき事を実現させるために、今各自の部署につかねばなりませんから、このたびはラミューがあなたのお供をするはずですよ」

オーソンとカルナが一方へ消え去ると、ファークンとイルムスが船体の反対の端の方へ向かって出て行く。ラミューと私はちよつとのあいだ無言のままジュースを飲んだ。自分が、この室に満ちたあたたかさと楽しさの一部であることが私は嬉しかった。このために今夜行われる別れにつきまとう悲痛の感情をひっそりさせることができた。

二、三のグループが奇妙なゲームをやっている。私の興味に気づいたラミュー

が、もう少し近寄って見ようと誘いかけた。

四人の男が小さなテーブルをかこんですわり、カードのゲームに興じている。カードの大きさは地球のものとはほとんど同じだが、性質は全く違っている。どのカードにも数字はなく、何かを表示するマークがついている。同じものが二枚あるかと思つてのぞいて見たが、私の目についた限りではなかった。

男たちの別なグループは、なめらかな板にそって小さな色つきボールをころがしていた。このボールはある種の磁気を帯びているのだらうと思つた。板にはミゾがないのにボールは一定方向にだけ動くからだ。ボールのなかには他のボールを引き寄せているらしいのもあつた。

他のゲームは地球の卓球にやや似ていたが、違うのは二個のボールが同時に使用される点である。そのためには、明らかに非常な熟練を要するが、婦人たちはたいそう上達しているように見えた。

感動したのは、高声、哄笑、その他の熱狂ぶりがないことである。見たところだれもが楽しそうであり、地球人がしばしばやるような、耳ざわりになるようなこともなくゲームをすることができると、地球人のごとくゲームを深刻に考えているようにも見えない。雰囲気は陽気でくつろいだままである。ときどき、ゲームをやっている人たちが親しみのある微笑を浮かべて私たちの方をちらりと見上げたりする。なかには話しかけてくる人もあるが、この人たちが流暢な英語を話すのを聞いて、私は今更のように驚い

た。  
しばらくしてラミューが誘いかけた。  
「操縦室へ行きましようか。そこには面白いものがありますので、きつと興味をおもちになるでしょう」

グラスを手に持ったまま私は喜んで彼について行き、大きな部屋へ入った。そこは最初にこの宇宙船を訪問したとき見たことのある沢山のチャート、グラフ、機械類がある所だ。

二人が室内へ入ったとき、ラミューが一個のボタンに触れたのだろう。床からまるで魔法のように、二個の非常に小さな座席が浮かび上がるのを見た。と同時に真正面にある大型スクリーンの中央に月面が出現したのである。その拡大された画面に私は一驚を喫した。全くスクリーン上の写真というようなものではなく、実景そのままの立体的な光景なのである。「驚くべきもの」とはこれだったのだ。瞬間、私たちは実際に月面へ着陸しようとしているのではないかと思つた。

ラミューが言った。

「あなたがごらんになっているのは地球から見える側の月面ですが、私たちはそこに着陸するわけではありません。この光景は、最初あなたが来られたときに操作されなかった望遠鏡から、このスクリーンに投影されているのです。本船は月の表面に接近しますから注意して見て下さい。かなりの活動状況が見えます。地球から見える多数の大クレーターの中に、巨大な格納庫(複数)が見えますよ——地球人はこのことを知っていませんよ」

注目して下さい。この地形は地球の砂漠とほとんど同じなのです。

私たちは本船よりもはるかに大型の宇宙船が容易に入れるように、こんな大規模な格納庫類を建設していますし、これらの格納庫の内部には多数の作業員とその家族用の宿舎があり、あらゆる設備がしてあります。豊富な水が山々からパイプで引かれていますが、これはちょうど地球の荒地を肥沃にする目的で地球人がやっているのと同じです。

宇宙船がこれらの格納庫へ入るときは、乗船者の体内の減圧処理がほどこされます。これには約二十四時間を要するのです。もしこれを行わないと、乗船者は月面に一歩降りたとたんに極端な苦痛を体験するでしょう。このような減圧処理法はまだ地球人の考え及ばぬものです。彼ら地球人は肉体の機能とその制御法をほとんど知っていないのです。実際には人間の肺は、人体内部の収縮と膨張が急速に起こらぬ限り、超高压はかりか超低压に対して自然に調整できるようになっているのですが、急激に変化するるとその結果は死です」

月面への実際の着陸が許されるならば私は喜んで必要な減圧処理を受けるだろう。すぐ地球へ帰る必要はないのだ。

しかし同情の微笑を浮かべてラミューが言った。

「地球へおつれる前に月の裏側をお見せするほか、あなたのために多くの事が用意してあるのです。さあ、よく見て下さい。本船は月のフチに接近していきま。あの雲(複数)をごらん下さい。み

な薄くて、どこからともなくやって来るように見えますが、これは雲にありがちなことです。ほとんどの雲は全然濃密にならないで、すぐに散ってしまいます。しかし適当な条件のもとでは、ときどき濃密になることもあります。この雲の影が地球から望遠鏡で見られています。

今、本船は地球から全然見えない側へ接近しています。真下の地表を見て下さい。いいですか、この地域には山々がありますね。高山の峰々には雪さえありますし、低地の斜面には大森林が茂っています。月のこの側には多くの山中湖や川もあります。真下には湖の一つが見えるでしょう。川から多量の水が注ぎ込まれるのです。

谷間や山腹にいろいろな大きさの部落が沢山見えます。この人々は、他の世界と同様に、さまざまな高度の土地を選んで住むのです。また、生命を維持するための自然の活動は、他の場所と同じように、人類がどこで住もうとみな同じようなものです。

着陸して減圧処理を受けた上で歩き回る時間があれば、あなたは住民たちと直接に会えるでしょうが、月面の研究に関する限り、今観察している方法がはるかに実際のなのです」

眼前のスクリーンにかなり大きな都市が出現したとき、この言葉が間違っていないことがわかった。実際、私たちは屋根の真上に滞空しているような感じがするのだ。すると、きれいな狭い道路を歩いている人々が見えた。もっと密集して建てられた中心地区があったが、これは

ビジネス街なのだろう。ただし人影はまばらである。いかなるタイプの自動車も街路にとまってははいない。しかし数台の乗物が街路から「浮き上がって」動いているのに気づいた。それらには車輪がついていないからだ。大きさは地球のバスと同じぐらいでどれもほとんど同じようなものである。

ラミューが説明した。「この少数の人々は自分の輸送用乗物を持っています。が、たいは今は今見るような公共の輸送機関を利用します」

主都市のすぐ外側に比較的大きな広い地域があり、一方の端にそって巨大なビルディングが一つあった。どうも格納庫のように見えるが、ラミューが次のように言うてそれを確認した。

「この住民に必需品を持って来て着陸する便宜上、各都市の近くに数棟の格納庫を建設する必要があります。住民の必需品で、ここで手に入らない物すべてを運ぶのです。交換として彼らは月世界で産出する鉱物を供給してくれます」

注目している、その都市が急に遠ざかるように思われた。するとラミューがこれから月と地球のあいだの空間へ引き返すのだと言う。

「休憩室へ帰るまでに何か質問がありますか？」と彼は尋ねた。

私は何も思いつくことがなくて首を振った。「それなら」と彼は眼を輝かしながら言うて「休憩室へ行く方がいいでしょう。フアーコンと私の帰郷を祝うために会食が準備されていますから」

切迫した訣別を思い出させるこの言葉

を聞いてわき起こった哀切の念に私はま  
たも恥じたが、心中で私自身を彼らの立  
場におくことよって、これを克服した  
のである。彼らの環境のなかにあつて私  
は楽しくないというのか？ たしかに楽  
しいのだ！

「私が涙を流すとすれば、それは私自身  
のためです」と、軽い動揺とたたかない  
が私は言った。「あなたのためにはう  
れしいのです」

オーソンとカルナがドアのところで  
迎えてくれて、私たちは一緒に休憩室へ  
入った。室内の片隅に大きなテーブルが  
準備してあるの見える。以前ゲームを  
やっていた婦人たちのいく人かが最後の  
仕上げをしていた。

フアーコンとイルムスが反対側のドア  
ーから入って来ると、カルナはその友と  
一緒にになり、二人の婦人は部屋から出で  
行った。まもなく二人はパイロット服か  
ら美しいゆったりとしたローブ（長いゆ  
るやかな婦人服）に着替えて引き返して  
来た。

黄金色と黄色の繊維の美しい布がテー  
ブルを覆っているが、これは色のついた  
一定の模様をともなわないデザインで織  
られている。座席が両端まで並べてあり  
両側にも並べてある。テーブル上の「食  
器」は地球のものに比べてデザインが少  
し違っている。むしろ進歩していると私  
は思った。美しくちりばめた各種の金属  
を組み合わせてできているようだ。

テーブルの上席に椅子が一つあり、そ  
の両側に十四脚ずつをかぞえることがで  
きた。カルナとイルムスが一同に加わる

と、みんなは着席するようにすすめられ  
た。婦人は八名いるだけで、男は私を含  
めて二十一名である。

ラムニーがマスターの右側にすわり、  
フアーコンが左側にすわった。イルムス  
はラムニーと私のあいだに位置し、カル  
ナは向かい側のフアーコンとオーソンの  
あいだに席を占めた。

全員がすわり終わるとマスターは起立  
した。ちよつとのあいだ室内は崇高な静  
寂さで満たされたが、やがて、柔らかな  
明瞭な声で偉大な師父は次のように発言  
した。

「今、私たちはこの食物にたいして無  
限なる方々に感謝します。願わくば、あ  
なたの広大な領域内の万人が等しくその  
恩恵にあずかることを。この食事によ  
つて私たちの肉体が強化され、肉体の内  
部に宿る聖霊に貢献し、あらゆる生命の  
創造主たるあなたの御心にそむくこと  
を――」

この美しい祈りの言葉が述べられてか  
ら、すべては再び一瞬の静寂にかえつ  
た。

続いてマスターはなおも起立したまま  
言葉が続けた。

「今ここに二人の兄弟によつて遂行  
された地球上の使命の成功を、深い喜び  
でもって祝福するために、私たちは今夜  
ここへ集まりました。フアーコンとラム  
ニーは立派にやつてくれました。二人が  
ホーム惑星へ帰れるようになったその努  
力に報いて、私たちは喜びを共にするも  
のです」

薄い金色の液体を満たした水晶のよう

なゴブレット（台つきグラス）がテーブ  
ル上の各自の前においてある。マスター  
は話し終わるとグラスを持ち上げて言っ  
た。

「お互いを、そして宇宙の同胞を祝福し  
て飲みましょう」

私はグラスを唇へ運んだとき、この上  
ない芳香に気づいて、それを失ってはな  
らじとばかり、きわめてゆつくりと液体  
をすすった。どうも酔っぱらうような性  
質のものとは思えなかったが、多量に飲  
めばその影響があるブドー酒に似ている  
ようだ。

ラムニーとフアーコンに敬意を表して  
一同がグラスを持ち上げてみると、どこ  
からともなく響いてくる静かな音楽が室  
内に流れわたった。今までに聞いたこと  
のないような音楽だが、全身をゆさぶる  
ような気がする。珍しく、しかも美しい  
メロディーで、時折、地球の音楽に似た  
調べもまじっている。

他の世界の人々と会食する光栄に浴し  
たのはこれが最初なので、当然のことな  
がら、この食物が地球の食物にどの程度  
類似しているかを知りたくなった。

テーブルの両端と中央には果物を盛つ  
た美しい鉢がおいてある。一つの鉢はち  
ょうど大きな赤いリンゴに見えるものが  
盛っており、どれも手をつけなのままの  
果柄がついてある。私に差し出された一  
つを受け取りながら、ぱりぱりとした果  
汁の多い果肉を期待したが、噛んでみる

と、この果肉は引きしまつて熟した桃ほ  
どの固さがあることに気づいた。味は桜  
の実とリンゴを一緒にしたような味で、

芯には大きなリンゴの種みたいな大きな  
種が入っていた。

別な果実で、外観と香りが大きなキイチ  
ゴに似ているのがあった。このイチゴ  
の最小のものでさえ、少なくとも地球の  
その最大のものよりも四倍はある。

テーブル上の各所には、いろいろな果  
汁や他の飲料を満たした大きな水差しし  
のような容器が配置してある。これで、各  
席の前に異なる大きさの数のゴブレッ  
トがおいてある意味がわかった。私が試  
みた二度目の飲料は純粹のキイチゴのジ  
ュースに似ていた。

長いテーブルの端に向かい合つてすわ  
っている二人の婦人によつて、食物がく  
ばられた。近くの壁にくっつけておかれ  
ている準備台から、婦人たちはまず湯気  
のたつ野菜の皿を運んで来た。一枚の皿  
には普通のニンジンのように見えるもの  
が盛られているが、肉はさほど固くはな  
く、一種の甘ずっぱい味である。次の野  
菜は私にとって親しいジャガイモのよう  
に見えた。これは（複数）皮がむいてあ  
るけれども、自然の形のままで出され  
た。淡黄色を帯びており、オランダポウ  
フウのような粗い繊維はないが、それに  
似た味がする。私が食べた別な野菜で葉  
と色合いがパセリと同じで、レモンのよ  
うな甘い芳香を放つのがあった。

私が食べなかつた野菜がまだ他にも沢  
山ある。生来、私は少食のうえに、今夜  
は心が乱れているので、ほとんど食欲は  
起らない。この祝いの目的を心中から  
消そうとしたが、むだであった。よき友  
フアーコンとラムニーは、はるかなる故

郷へ帰るのだ……。

しかし私は非常に粗い、まっ黒なパンの小さなかたまりと、はじめは肉だと思つたものを一切れ受け取つた。パンには黄金色の皮がついていて、主としてタルミで作つたかのような味がしたが、穀類の味も含んでいるのがわかつた。こげ茶色の「肉」の切れを噛みながら、内心その味を上手に料理されたビーフにたとえてみると、カルナがテーブルの向かい側から話しかけた。

「それは金星のある植物の乾燥根ですわ」と彼女は説明して「金星では生の植物を料理します。するととってもいい味になるのですが、宇宙旅行中は乾燥したものを運ぶのです。それは肉の中にあるすべての蛋白質を含んでいますし、人体に吸収されやすいので、特に栄養価が高いのです。ここに出されたこの根の一切れは、地球のステーキの一ポンドに相当します。また、他の食物のすてきな調味料にもなりますわ」

食事が終わると大きなケーキが出た。これはいわゆるカステラの外観を呈しているが、切ってみるとカステラ特有のふわふわした弾力性は全然ないことがわかつた。その上、主として白色だが黄色いすじが混じっている。肌理が非常にこまかくて、文字どおり口の中で溶けそうである。かすかに甘い味がするが、黄色いすじが白味から分離すると、その味は名状しがたい甘味に変わった。全体的には美味である。

テーブルの周囲にいる他の人々を見て彼らの楽しそうな話し声に耳をかたむけ

ながら、地球の会食でよく見られるように、出席者が多量の食物をがつがつと食べていないことに気づいた。しかもみんなが食事を楽しんでるようだった。

会食の最後に、婦人たちと幾人かの男が席から立ち上がって、皿などを片づけた。私にはもうよくわかつてるあの不思議な方法で、テーブルの背後の壁から台所へ通じる大きなドアが突然開いた。そこは全くの固い壁にしか見えなかつたのである。この室内へあらゆる物が運び込まれた。まもなく出席者たちが各自の椅子へ帰って、ドアが彼らのうしろでしまつた。

ところでバックグラウンド音楽がやむと、一人の男が席から立ち上がって、全然伴奏なしに母国語で歌をうたつた。その言葉は理解できなかったが、声の美しさに私は魅了されながら聞いた。

うたい終わるとイルムスが言った。「あれは故郷へ帰る兄弟たちのための別れと祝福の歌です」

またどこからともなく音楽が響きわたつた。以前よりも音が大きく、もっと活発な陽気な曲である。

この理由はわかつた。二人の婦人が立ち上がって、テーブルのむこうの広い場所へ行き、美しいユニゾンで音楽に合わせて踊り始めたからである。後に聞いたところでは、このダンスは宇宙の力を表現したものだといふ。

見つめているうちに、この踊りを演じるには（前後左右に自由に動く）二重関節と、幼児のような柔軟さを必要とすることがわかつた。実にすばらしい見もの

である。その体のあらゆる動作と姿勢は静止したおだやかな水から宇宙の最もすさまじい嵐に至るまで、多くの自然の变化をかわるがわる表現した。

このようなりズムを言葉で説明するのは不可能であるが、ながめてみると魅惑的で深く感動させる。この若い踊り手は二人とも非常な美女で、着ている衣服は動いているあいだ色が変わるように思われたが、それを照らしている光線は見当たらなかつた。最高の意味における「優雅」という言葉も、この美しい演技の公平な評価にはならないだろう。

ダンスが終わって少々時間が経過してから、マスターがオーソンに話しかけると、彼は私がすわっている所へやって来て言った。

「それでは、私たちの惑星である金星の光景をお見せしましょう。これは金星から直接本船に送られて来るのです」

このような光景つきの説明を聞かされることを期待して私は喜んだ。そしてどのスクリーンに現れるのだろうかといふか。だがスクリーンはない。照明が少し暗くされて、私の啞然とした凝視の前に、最初の光景が室内の空間に浮かび上がったのである。

オーソンは私の驚きを楽しんでいるらしく、次のように説明した。

「好みの距離まで光線を放射して、それを停止できる一種の映写機があるので、光線の停止した位置が眼に見えないスクリーンになって、そこで色彩と実際のままの立体感を伴いながら画面が集中されるのです」

私が見ている光景は、たしかに「そこに」あるように見えるので、私がまだ船内にいるとは到底信じられないほどである。壮大な山々が見えた。頂上が雪をかぶっているものもあるし、全く不毛で岩だらけの山もあり、地球の山岳地帯と大差はない。うっ蒼と茂った森林に包まれていられるもあり、その間を溪流が走り、山腹へ滝となって落下するのが見える。

オーソンが私の方へよりかかって、さやいた。

「金星には多くの湖と七つの海があり、どれもみな自然の、もしくは人工の水路につながっています」

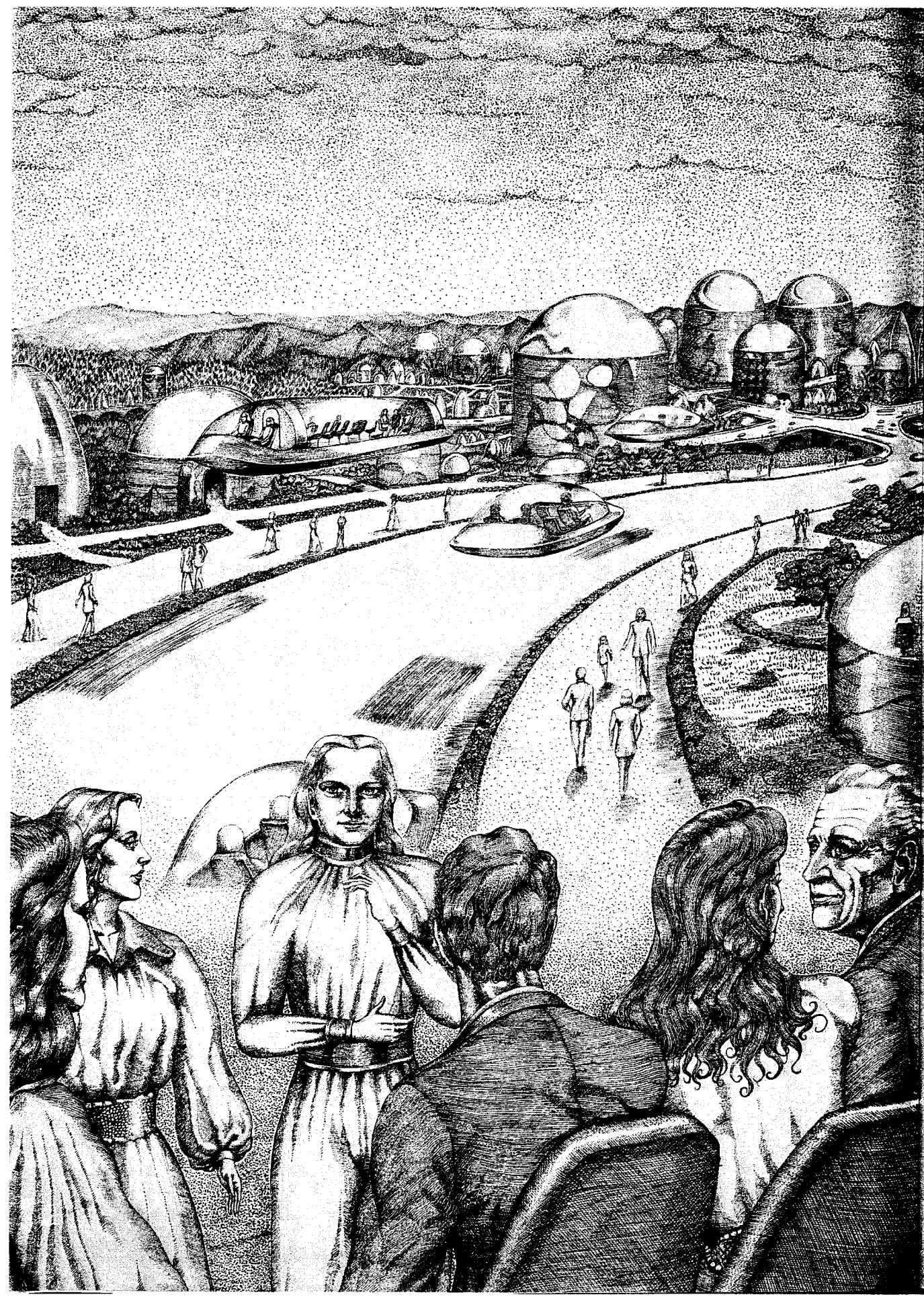
今度は金星の都市を少し見せてくれた。大小いろいろある。なにかすばらしいお伽の国へつれて行かれたような感じがする。建築物は美しく、外形は複雑である。多くは虹色を放射するドームがついており、それが生き返るような力を与えるがごとき印象を与える。

オーソンが静かに言った。

「夜になって暗くなれば、あの色が消えてドームは柔らかな黄色光で輝きます」あらゆる都市は円形または楕円形になっており、密集しているように見えるのではない。この集中都市間にはまだ住民の住んでいない土地が沢山ある。

これらの都市の街路上に見える人々は各自の勤めに出かけようとしているらしく、この点は地球人と大差ないが、地球人に見られる雑踏や気苦労などは見られない。衣服も似ており、大体のスタイルも共通しているが、どうやら個人の好み





にに応じて服を選ぶようだ。

私が見た最も背の高い人は約一九五センチメートルで、大人の平均身長は約一六五センチメートル、最も背の低い人で約一メートルぐらゐである。しかしこの場合は子供かもしれない。だが確言はできない。地球人のように年齢をあらわす人がいないからだ。この最小の人間よりもっと小さな子供たちをたしかに見た。

ある場所から他の場所へ移動するときの乗物で地球の自動車に相当するものとして、この母船を超小型化したような乗物が眼についた。これらは地上の空間を滑るように動いて見えるが、月面を見たあの「バス」と同じである。この輸送機関は地球の自動車と同様に大きさがさまざま、なかには天井のないものもある。これらがどのようにして推進するのだろうかと考えていると、オーソンが再び耳許へ口を寄せて説明した。

「宇宙船を作動させるのと全く同じエネルギーを応用するのです」

道路は立派にととのつており、色とりどりの花で美しくふちどられている。

次に、ある湖畔の砂浜が見せられた。砂はたいそう白くて、きれいである。長くて低い波がほとんど眠りたくなるような調子で押し寄せている。砂浜と水中に沢山の人がいる。人々の水着にはどんな織物を使用してゐるのだろうか。水を浴びたあととも全然ぬれていないように見えるのだ。

そへ来てすわっていたカルナがこの理由を明らかにした。

「あの織物は完全防水になつてゐるばかりでなく、太陽の有害な放射線（複数）を防ぐ性質を持っています」

更に説明を続けて「地球と同様に、この放射線は内陸よりも水からの反射の方がもっと強烈になるのです」

今度は金星の熱帯地方が見せられた。驚いたことに、一般的な意味で言つて、樹木の多くは地球のしだれ柳にやや似ていて葉は滝のように垂れさがつてゐる。しかし色と葉のこまかい部分は全然異なるものだ。

読者も想像されるだろうが、いろいろな場面に現れてくる動物に私は非常な興味をもつた。砂浜に、小さな、毛の短い犬を一匹認めた。他の場所には種々の色や大きさの小鳥がいたが、地球の小鳥と大差はない。一羽の小鳥は地球の野性のカナリヤとそっくりに見えた。田舎には馬や牛が見えたが、どちらも地球の牛馬よりは少し小さいものの、他の点では非常によく似てゐる。この類似という点は金星のあらゆる動物にあてはまるようである。

また花も地球で咲くものと似てゐる。次のように言えるだろう。つまり金星の動植物を地球のそれと比較した場合の主な相違点は、色と肉の肌理にあると。カルナの話によれば、これは金星には常にいちじるしい湿気が存在するためだといふ。

彼女は言う。

「あなたはすでに知つてゐるように、金星人は地球人が見るようには星をほとんど見ないのです。私たちはただ宇宙旅行

と研究によつて、空の彼方の天界の美を知るだけです」

最後に、十八人の子供をつれた非常に美しい婦人とその夫のいる場面を映し出した。子供たちの一人だけ除いてあととはみな十分に生長してゐた。しかし両親は三十歳そこそこの若夫婦という印象を与えてゐる。

これで映写は終わり、私は質問をするようにすすめられた。そこでまず、金星を絶えず雲が覆つてゐる状態は、もし与えるとするならば如何なる影響をその住民に与えるのかと尋ねてみた。

オーソンが答えた。

「宇宙の法則に従つて生活するばかりでなく、金星の大気は人間の平均寿命を一千年にするのに一因となる要素です。地球もこのような大気を持つていた当時は地球人の年齢も現在よりは、はるかに長かつたのです。

私たちの各惑星をとりまいてゐる雲は、破壊的な放射線を弱めるフィルターとして作用します。この雲がなければ放射線は大気圏内に入るでしょう。地球の聖書に出てゐるある記録について、あなたの関心をうながしたいと思います。聖書を注意深く研究されますと、地球上の寿命は、雲がへつてきて人間が始めて宇宙の星々を見たときに短くなり始めたという個所に気づかれるはずで

地球の傾きが今でも次第に起こつてゐるといふことを知れば、あなたの関心をひき起こすかもしれません。これはいつでも起こり得ることなのですが、もし地球がその周期を終えようとして完全に傾

くならば、今海底にある土地の多くは隆起するでしょう。そうすると、この水につかつていた土地は長いあいだ蒸発し、このために再び常に雲で覆われる状態、すなわち地球のまわりの「天空」をつくり出すでしょう。そうならば、寿命はまた延びてきますし、地球人が創造主の法則に従つて生きることを学ぶならば、あなたがたも一人の肉體で一千年に達することができま

す。この地球の傾きこそ私たちが絶えず行つてゐる観測の一つの理由なのです。なぜなら、この銀河系内の他の惑星群に対する傾きの関係は非常に重要であるからです。一惑星の激的な傾きはある程度全惑星群に影響しますし、私たちの宇宙旅行の航路を完全に変えてしまふのです」

「たしかに、激的な傾きは地球上に大変動をもたらすでしょうね？」と私は尋ねた。

「必ず起こります」と相手は答えて「人間と人間の住む惑星の関係を支配する諸法則は、現在のところ地球人に理解されないでしょうが、私が強調したいのは、彼らがこれまで終始一貫して歩んできた誤つた道こそが、地球の現在の不安定さを感じがずにゐる原因なのです。何世紀をも通じて多くの徴候、前兆などがありました。地球人は無視しました。これらの多くは地球の聖書に予言として記録されてゐます。しかし地球人は氣にとめませんでした。しかも多数の予言は実現しましたが、そのレッスンは学ばれなかつたのです。万物の創造主から離れることは賢明ではありません。人類は自分に



た。別れの言葉を出さないで、みんなは片手を上げた。私も片手を上げた。それから私はオーソンのあとにしたがって、母船の通路を小型機の方へ導かれて行った。

フアーコンとラミューの両人がロサンジェルスへのドライブに同行したが、私たちは何も話さなかった。

ホテルへ帰って、この親友たちと別れる時間が来たとき、全身に激しい悲痛の念がわき起こった。握手を交すとラミューが静かに言った。  
「あなたに『無限なる方』の祝福がありますように」

私は二人と別れて、ひっそりとした自室へ上がって行った。(以下次号)

× ×  
× ×  
× ×

—超満員の会场上空に UFO が出現!—

## 昭和50年度総会、大盛況!

去る12月13日、恒例の日本GAP総会が東京、上野公園内の東京文化会館4階の大会議室で開催された。

例年のごとくすばらしい晴天に恵まれた土曜日久保田代表の米国GAP本部訪問と、その際撮影された貴重な未公開写真を一目見ようと全国から熱心な会員たちが続々とつめかけ、2時の開会を待たずして会場の80席はすべてふさがるといふ盛況ぶりを見せたが、会員はその後3時すぎに200名を突破し、会場は超満員にふくれあがった。

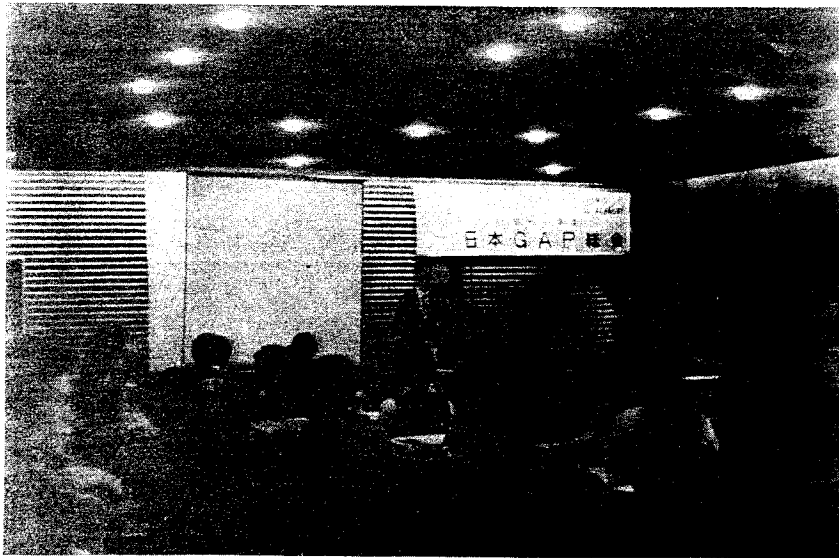
片京氏の司会で総会が始まり、久保田代表の挨拶のあと、全員の注目の中でスライド上映が開始された。それから約3時間半、F・ステックリン

グ、S・ホワイトティング、アリス・ウェルズ、パロマー・ガーデンズ、謎のクリスタル等々、目をみはるものばかりが休む間もなく続き、200余名の熱気と代表の熱弁とで会は最高潮に達した。

5時50分、盛大な拍手とともにスライドが終わり、10分間の休憩の後、質疑応答が行なわれ、6時30分、大成功のもとに無事幕を閉じた。

しかし、これがすべてではない。一昨年に続いて今回も会场上空にUFOが大挙出現した。開会寸前、3時半、4時、4時半と、いずれも5～6名の目撃者がいる。GAP総会とUFO……ともにGAP会員に対してすばらしい希望を与えたのではないだろうか。(福沢)

### ●講演中の編者









アダムスキー哲学三大名著 絶賛発売中!

スペースブラザーズから伝えられた宇宙的思惟法と宇宙的な生き方を三部に分けて詳述。GAP 会員必携の書。注文は各出版元へ直接どうぞ。

G・アダムスキー 久保田八郎訳

# 宇宙哲学

¥480 千120

東京都新宿区納戸町33たま出版 振替東京94804

## 宇宙問題探求者必読の書

### 宇宙人から伝えられた人間の生き方を詳述 テレパシー ■ 生命の科学

ジョージ・アダムスキー/久保田八郎訳

¥400 千120

¥550 千120

**絶賛!** アダムスキーの弟子でありコンタクトイ  
ーでもあったフレッド・ステックリングのすばら  
しい体験記と哲学! 特に幼児教育について重要  
な示唆を与える。宇宙問題探求者必読の書!

### ★★なぜ空飛ぶ円盤は来るのか★★

フレッド・ステックリング/久保田八郎訳

好評発売中! ¥650 千120

文久書林

東京都文京区白山1-29-12  
振替・東京2521 Tel. (813) 2495



## オーソン 肖像写真

ジョージ・アダムスキーが砂漠で最初にコン  
タクトした金星人は後に「同乗記」でオーソ  
ンという名で出てくるが、これをA氏の記憶  
にもとづいて画家に描かせた肖像画をカラー  
写真にしたものを日本GAPでは月例研究会  
で頒布してきた。残部が少々あるので希望者  
は直接本部宛注文されたい。スペース・ブラ  
ザーズとの一体化を図る上で重要な資料とな  
るものである。

### カラー全身像

◎キ+ビネ判(11.5×16.5c) ¥500

千100

上記写真のみは直接日本GAPへご注文を。

## 編集後記

■久方ぶりに本誌を刊行できて嬉しく思いま  
す。原稿作成と編集自体はさほど困難事では  
ありませんが、問題は発行資金です。この世  
界では如何に高度な理想主義活動を行なうに  
してもカネがなければどうにもならないこと  
を痛感します。ご寄付は如何程でも歓迎いた  
します。

■昨秋の米国出張以来超多忙となり、編者の  
活動能力はほぼ限界に達しています。郵便物  
の処理が遅れて申し訳ありませんが、事情をご  
賢察下さい。

■今回より米GAP本部訪問記を連載いたし  
ます。かなりの長篇になる筈で、その意味で  
も本誌をもっと頻繁に刊行する必要を感じて  
対策を考慮中です。

■本号は予定の頁数を超過したために、「ア  
ダムスキーに関するコメント」と「声」欄  
の掲載を中止しました。

■二月の月例研究会より夜の部の英語研究会  
を中止し、かわりに夕食会を開催することに  
しました。研究会終了後、六時すぎから上野  
公園内の精養軒で希望者のみの夕食会を開い  
て和気あいあいたる雰囲気を楽しみたいと思  
います。ふるってご参加下さい。

■近く郵便料金が値上げされ、本誌送料も従  
来の七〇円から一六〇円になります。今後の  
誌代は一回分が送料共四六〇円となり、三回  
分は計一三八〇円です。ご了解下さい。

■ユニバース出版社発行「UFOと宇宙」第  
16号が書店に出ています。このトップ記事の  
「三原市の驚異コンタクト事件」は同誌特別  
取材の大ヒット情報で必読の体験記です。  
■遠からぬ将来日本列島に大変動が発生する  
か否かは予断を許しませんが、何が起ころう  
とも悠揚追らざる態度を持し、創造主の子と  
して価値ある生き方を続けようではありません  
か。その意味でもアダムスキー哲学はきわ  
めて重要で。

■御寄付の御礼。(昨年六月一日より十二月  
末まで。敬称略) 匿名氏(東京三万一千円、  
隆井幸子(札幌市)二千八百九十円、大久保  
照司(東京)七千円、菅原一浩(岩手県)三  
万五百円、田中真知子(岐阜市)五千円、津  
野田俊行(熊本市)一千円、山下昇(浜松市)  
四百六十円、深沢義久(横須賀市)一千円、  
無名氏(市原市消印)二千二百九十円、橋本  
和宏(神奈川県)八百九十円、伊藤達夫(愛  
媛県)二千円、笠原弘可(仙台市)五千円、  
大谷和枝(茨城県)八百九十円、千田光昭(横  
須賀市)一千円、山田宏三郎(京都市)五千  
円、横山淳一(東京)四百六十円、多田晃  
(名古屋)一千六百三十円、匿名氏(栃木県)  
一千円、匿名氏(千葉県)一万円、匿名氏  
五千二百九十円、菅原史崇(埼玉県)一万八  
千円、無名氏二千五百円、堤芳紹(佐賀市)  
中村光孝(春日井市)五千円、安藤晴信(横  
浜市)一千円、上山節子(神奈川県)八千円  
平塚和義(兵庫県)五千円、須賀恵子(東京)  
五千円、福沢淳(東京)九千円、片野純而(和  
歌山県)五千円、関谷正明(滋賀県)五千円  
中岡桂園(滋賀県)五千円。

■会費切れの方には別に通知致しますので、  
なるべく早目に納入のほどお願いします。

Jan. 20 1976

GAP ニューズレター 57号

編集発行人 久保田八郎

発行所 日本GAP

〒133 東京都江戸川区本一色町365-818  
振替東京4,359,112(久保田八郎名義)

頒価3000円・送料700円